

# 押 部 遺 跡

神戸市西区押部谷町所在  
第2次発掘調査概報

神戸市教育委員会

1991

# 押 部 遺 跡

神戸市西区押部谷町所在  
第2次発掘調査概報

神戸市教育委員会

1 9 9 1



## 序

国際港湾都市神戸は、ポートアイランドや六甲アイランドの建設のように海への進出とともにニュータウン建設のような内陸への開発を進めています。

これらに歩調をあわせ農業用地の確保・整備を目的とした圃場整備事業が進められています。

今回の報告は、この圃場整備事業にともなう発掘調査の報告書であります。

さきのようすに開発が進むなかで、神戸市域の中でも明石川周辺は、神出古窯址群、玉津・田中遺跡、吉田南遺跡など全国的にも注視されている遺跡があり、また多くの遺跡が存在している地域です。

開発事業件数に比例して発掘調査件数は、増加しています。しかしながらその発掘調査成果を公表するための報告書の刊行は、遅滞気味であります。

今回の報告では、そのなかで未解明な部分の多い明石川上流域の古代の生活の一端を知っていただければ幸いであります。

平成3年3月

神戸市教育長

福尾 重信



## 例 言

1. 本書は、神戸市教育委員会が昭和62年度に実施した押部遺跡第2次調査の発掘調査概報である。

2. 昭和62年度調査組織

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会員）

小林行雄 京都大学名誉教授（故人）

檀上重光 神戸市立博物館副館長

宮本長二郎 奈良国立文化財研究所

教育委員会事務局

教育長 山本治郎

社会教育部長 岡村二郎

文化財課長 西川知佑

埋蔵文化財係長 奥田哲通

同主査 中村善則

事務担当学芸員 渡辺伸行

調査担当学芸員 口野博史・前田佳久

3. 発掘調査中には、神戸市押部土地改良区から種々の便宜をはかっていただき、また地元の人々の多くの協力を得た。

4. 第4章第2節については、立命館大学 山尾幸久氏より御指導をいただいた。

5. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行地形図25,000分の1「三木」・「淡河」・「東二見」・「前開」・「須磨」の一部と神戸市発行地形図2,500分の1「福住」の一部を使用した。

6. 発掘調査及び整理作業では、下記の方々の協力を得ました。記して感謝いたします。

調査補助員 柳原武和・藤原純子

整理補助員 井守芳美・岩本優子・古賀文子・重田佳余・園川陽子・

田中美佐江・西馬久美子・藤本千晴・三輪恭子・

森岡かおり

# 本文目次

序	
例　　言	
第1章　調査の経過	1
第1節　調査地の環境	1
1. 調査地の位置	1
2. 調査地の環境	1
第2節　調査経過	2
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査区の設定	2
3. 調査の方法	2
第2章　歴史的環境	3
第3章　調査の概要	7
第1節　基本層序と地形	7
1. 基本層序	7
2. 地形	7
第2節　遺構	11
1. Aトレンチ	11
2. 1トレンチ	11
3. 2トレンチ	12
4. 3トレンチ	14
5. Bトレンチ	16
6. Cトレンチ	18
7. Dトレンチ	18
8. 4トレンチ	20
9. Eトレンチ	20
10. Fトレンチ	20
第3節　遺物	21
1. 各トレンチ遺物包含層	21
1) Aトレンチ遺物包含層	21
2) 3トレンチ遺物包含層	21
3) Bトレンチ包含層	21
4) Eトレンチ包含層	22

2. 2 トレンチ遺構内出土遺物	22
1) S B 0 1	22
2) S K 0 1	23
3. 3 トレンチ遺構内出土遺物	25
1) S X 0 1 内 P 2	25
2) S D 0 4	25
3) S D 0 5	26
4) S X 0 5	26
5) S X 0 6	26
6) S D 1 2	26
4. B トレンチ遺構内出土遺物	26
1) S X 0 3	26
2) S D 0 1	26
5. C トレンチ遺構内出土遺物	30
1) S D 0 2	30
2) S D 0 3	30
6. D トレンチ遺構内出土遺物	30
1) S B 0 1	30
2) S X 0 1	31
7. 小結	32
第4章　まとめ	34
第1節　調査成果	34
第2節　明石川流域における押部遺跡の位置	35

## 挿図目次

挿図1	押部遺跡位置図	1
挿図2	周辺の遺跡分布図	4
挿図3	調査地周辺地形と調査対象地	8
挿図4	トレンチ配置図	10
挿図5	主要遺構配置図	13
挿図6	BトレンチSD01出土遺物実測図	29
挿図7	CトレンチSD03出土遺物実測図	30
付図	西区白水出土の遺物実測図	33

## 挿図写真目次

挿図写真1	発掘調査風景	2
挿図写真2	重機掘削状況	2
挿図写真3	1トレンチ南部疊層検出状況	9
挿図写真4	3トレンチ中央部疊層検出状況	9
挿図写真5	2トレンチより1トレンチの検出状況（北から）	11
挿図写真6	2トレンチSK01半掘遺物出土状況	12
挿図写真7	3トレンチSX05検出状況（東から）	15
挿図写真8	3トレンチ南部の遺構検出状況	15
挿図写真9	BトレンチSD01断面	16
挿図写真10	Bトレンチ全景（南から）	16
挿図写真11	Bトレンチ断割状況（西から）	17
挿図写真12	S B 01 中央炉址断割状況	19
挿図写真13	4トレンチSD01検出状況（南から）	20
挿図写真14	Eトレンチ全景（西から）	20
挿図写真15	S B 01 遺物出土状況	22
挿図写真16	S X 01 内P 2 遺物出土状況	25
挿図写真17	S X 01 遺物出土状況（南から）	32

## 表目次

表1	周辺の遺跡一覧表	5
表2	市内滑石製品出土遺跡一覧表	28

## 写真図版目次

- 写真図版1 1 調査地全景航空写真（南から）  
(カラー)  
2 調査地全景航空写真（東から）
- 写真図版2 3 Aトレンチ全景（東から）  
4 Bトレンチ全景（東から）
- 写真図版3 5 2トレンチ全景（東から）  
6 2トレンチSB01（南から）
- 写真図版4 7 2トレンチSK01遺物出土状況（南から）  
8 2トレンチSK01完掘状況（南から）
- 写真図版5 9 3トレンチ全景（北から）  
10 3トレンチSD04（東から）
- 写真図版6 11 4トレンチ、Cトレンチ全景（南から）  
12 2、4トレンチ及びCトレンチ流路（南西から）
- 写真図版7 13 Dトレンチ全景（北から）  
14 DトレンチSB01（西から）
- 写真図版8 遺物包含層及びCトレンチ遺構内出土遺物写真
- 写真図版9 B・2トレンチ遺構内出土遺物写真
- 写真図版10 2トレンチSK01出土遺物写真
- 写真図版11 2トレンチSK01出土遺物写真
- 写真図版12 3・Bトレンチ遺構内出土遺物写真
- 写真図版13 DトレンチSB01出土遺物写真
- 写真図版14 DトレンチSX01出土遺物写真

## 図 版 目 次

- 図版1 A・1 トレンチ平面及び断面実測図
- 図版2 2 トレンチSB01 平面及び断面実測図
- 図版3 2 トレンチSK01 遺物出土状況平面・完掘平面  
及び断面実測図
- 図版4 B トレンチ平面及び北壁断面実測図
- 図版5 3 トレンチ北平面実測図
- 図版6 3 トレンチ南平面実測図
- 図版7 C・2・4 トレンチ平面及びC トレンチ断面実測図
- 図版8 D トレンチ平面実測図
- 図版9 D トレンチSB01 平面及び断面実測図
- 図版10 A・3・B・E トレンチ遺物包含層出土遺物実測図
- 図版11 D・2 トレンチSB01 出土遺物実測図
- 図版12 2 トレンチSK01 出土遺物実測図
- 図版13 2 トレンチSK01 出土遺物実測図
- 図版14 3・B トレンチ遺構出土遺物実測図
- 図版15 C・D トレンチ遺構出土遺物実測図
- 図版16 D トレンチSX01 出土遺物実測図

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査地の環境

1. 調査地の位置 神戸市西区押部谷町押部は、神戸市域の西北部に位置し、北は三木市に接する。

地質的には、大阪層群（明石累層）を基盤とした沖積層に属する。地形は、明石川やその支流によって開析された谷と丘陵で構成されている。

2. 調査地の環境 明石川の開析した押部谷を、神戸電鉄粟生線がはしる。三宮までは、1時間足らずの距離にある。

都市に近接する農地として押部谷町押部は、稲作の他に、菊花の栽培などをはじめとして商品作物の生産地である。

昭和40年代後半から、神戸電鉄線を挟んだ北側と南側の丘陵地に宅地開発が進められている。近年では南の西神住宅団地の築造や西の神戸複合産業団地の計画が進行し、昭和58年には西区の人口は10万人を越え、押部地域も開発の波が押し寄せている。

上記のようななかで、都市近郊農業の位置を確立するために圃場整備事業は、当地域にとって急務の条件である。

註 藤田和夫・笠間太郎「六甲山地とその周辺の地質」

神戸市企画局 1971



挿図1 押部遺跡位置図

## 第2節 調査経過

1. 調査に至る 昭和59年度より開始された西区押部谷町押部地区の圃場整備事業に伴い、  
経緯 埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を昭和59, 60年度に実施した。試掘調査の結果、弥生時代後期～古墳時代のピットや住居址、平安時代～鎌倉時代の土坑や柱穴などが検出された。  
昭和61年度は、田園池より明石川にそそぐ西谷川の西側の部分で発掘調査を実施した。発掘調査の結果、弥生時代後期の溝が検出され、奈良時代の円面鏡などが出土した。
2. 調査区の設定 今年度調査地は、前記の西谷川を挟んで東側の部分である。先年度に行われた試掘調査の結果を考慮し、埋蔵文化財を最大限に保護するための設計変更を教育委員会から農政局に申し入れた。  
協議の結果、工事施行範囲内での現地形の切土を最低限におさえ、盛土によって埋蔵文化財を保護する設計がなされた。  
これによって、発掘調査の対象地は工事施工上埋蔵文化財の破壊を避けられない部分とした。現地での計画線の測量は、教育委員会の立会いの下で農政局が行った。調査対象面積は、合計1,555m<sup>2</sup>である。
3. 調査の方法 調査対象地は、圃場整備事業によって施行されるパイプライン・排水路および現圃場の切土部分である。つまり工事によって遺跡が破壊される深さまで調査を行うことを基本とした。また工事深度に到達するまでに地山が検出されれば、調査は完了したと見なした。  
作業にあたっては、表土等は重機により掘削をおこなった。パイプライン・排水路にあたる調査区には数字のトレンチ名を、切土部分の調査区にはアルファベット名をつけ調査を行った。調査期間は、昭和62年11月2日から翌昭和63年1月14日までの約2ヶ月間である。



挿図写真1 重機掘削風景



挿図写真2 調査風景

## 第2章 歴史的環境

1. 地理的環境 押部遺跡は、明石川の上流右岸に位置する。西谷川と東谷川に挟まれた低平な河岸段丘とこれを被覆する土石流によって形成された土石流扇状地に立地する。標高は約93m前後である。
2. 旧石器時代と縄文時代 旧石器時代や縄文時代の遺跡は、現在のところ押部遺跡の近くでは知られていない。西方約3kmの雄岡山・雌岡山の山麓には旧石器の散布地が存在する。青池、拍子ヶ池、笠ヶ池、金棒池、大皿池の各遺跡から旧石器時代の石器や、縄文時代に属する石器の散布が知られている。他に縄文時代の標式遺跡として著名な元住吉山遺跡が明石川中流左岸に存在している。中流域の堅田遺跡には縄文時代晚期の土器が出土している。さらに堅田遺跡の下流の大畠遺跡でも縄文時代の土器が出土している。上記のように旧石器時代、縄文時代の遺跡で現在知られているものは僅かである。
3. 弥生時代 押部遺跡に近接する弥生時代の遺跡として、北側の丘陵上に栄墳丘墓群が知られているが、詳細な時期については不明である。押部遺跡の東側約800mの栄・木幡地区の圃場整備事業にともなう発掘調査で、弥生土器が出土している。そして当報告の押部遺跡での弥生土器の出土例が知られる程度である。このように明石川上流域では弥生時代の遺跡について、現状では詳述できる材料が少ない。
- 中流域では、左岸河岸段丘上に養田遺跡、丘陵上に養田・中の池遺跡・西神N. T. No. 7地点遺跡・西神N. T. No. 50地点遺跡・西神N. T. No. 65地点遺跡などがあげられる。この丘陵上には多くの弥生時代の集落址が存在するが、ほとんどがいわゆる高地性集落ととらえてよいようである。また前記の元住吉遺跡では、弥生時代の土器も出土している。対岸の丘陵上には鍋谷池遺跡が存在する。ここでは中期の住居址や前期に属する土器などが検出されている。ほかに弥生時代前期の遺構とそれに伴う遺物が検出された常本遺跡や西戸田遺跡がある。西戸田遺跡では弥生時代終末から古墳時代初め頃の時期の堅穴住居址が検出されている。
4. 古墳時代 古墳時代では、明石川上流左岸に西盛南遺跡がある。掘立柱建物、住居址、その他に製塙土器等が検出されている。右岸丘陵上には福住古墳群・縁ヶ丘古墳群・日吉谷古墳群などが知られている。現在は住宅地となり、旧状をとどめている所は少ない。また雄岡山南麓では横穴石室をもつ古墳や周溝と埴輪をもつ古墳も知られている。また周辺では唯一の前方後円墳が金棒池に存在する。
- 中流域右岸には、藤原橋古窯が存在する。この窯の西側の丘陵には七曲



挿図2 周辺の遺跡分布図

り古墳群がある。その他左岸では道心山古墳群が知られている。<sup>註19</sup>

中流域左岸では、丘陵からびる尾根上に堅田神社境内古墳群・西神N.T. No.9・11・32・33・87地点遺跡などの古墳群及び土壇墓群が存在する。<sup>註20</sup> <sup>註21</sup> <sup>註22</sup> これらの古墳群は、古墳から明石川を望むことができるという共通点が見出せる。また周辺では古墳時代の集落址が顕著ではないなかで、堅穴住居址が検出された黒田遺跡は、注目すべき遺跡である。<sup>註23</sup>

5. 奈良時代から 奈良・平安時代では、先に述べた栄・木幡遺跡があげられる。また最近室町時代の調査では、押部谷町和田に奈良時代の遺跡が存在することが明らかになった。また雄岡山周辺では、神出古窯址群と総称される平安～鎌倉時代の窯址が存在する。その数は100基に近い数字を示すようである。また窯址のみならず、この時期の掘立柱建物、木棺墓や土器の材料である粘土を採る粘土採掘坑なども検出されている。また中流域左岸では、同時期の西神N.T. No.90地点遺跡や繁田古窯址<sup>註24</sup>が存在する。

明石川上流域の中世の遺跡として栄・木幡遺跡・福住遺跡などがあげられる。また左岸丘陵上に、中近世の近江寺および近江寺<sup>註25</sup>がある。また明石川の支流である性海寺川の右岸に中近世の性海寺がある。中流域左岸丘陵上に、西神N.T. No.10地点遺跡がある。鎌倉～室町時代の火葬墓を含む集石墓群である。

6. 植谷川流域 また丘陵を挟んだ植谷川の上流には、端谷城がある。その他に植谷川中流域では池谷古墳群や池谷遺跡、弥生時代および中世の集落址である長谷遺跡などが存在する。

挿図2周辺の遺跡分布図を一見しても明らかなように、遺跡の分布状況は、各時代の遺跡とも明石川からそう距離を置くことなく、明石川の水系を中心で分布しているようである。

周辺遺跡名一覧表

1 押部遺跡	16 西神N.T. No.65地点遺跡	31 西神N.T. No.11地点遺跡
2 青池遺跡	17 錫谷池遺跡(錫谷池古墳群)	32 西神N.T. No.32・33地点遺跡
3 拍子ヶ池遺跡	18 常木遺跡	33 西神N.T. No.87地点遺跡
4 箕ヶ池遺跡	19 西戸田遺跡	34 黒田遺跡
5 金棒池遺跡(金棒池古墳)	20 西盛南遺跡	35 和田遺跡
6 大皿池遺跡	21 福住古墳群	36 神出古窯址群
7 元住吉山遺跡	22 緑ヶ丘古墳群	37 西神N.T. No.90地点遺跡
8 堅田遺跡	23 日吉谷古墳群	38 繁田古窯址
9 大畠遺跡	24 拍子ヶ池古墳群	39 福住遺跡
10 宋墳丘墓群	25 新内古墳	40 近江寺・近江寺 <sup>註25</sup>
11 栄・木幡遺跡	26 藤原橋古窯址	41 性海寺
12 寒田遺跡	27 七曲り古墳群	42 西神N.T. No.10地点遺跡
13 義田・中の池遺跡	28 道心山古墳群	43 植谷城
14 西神N.T. No.7地点遺跡	29 堅田神社境内古墳群	44 池谷遺跡・池谷古墳群
15 西神N.T. No.50地点遺跡	30 西神N.T. No.9地点遺跡	45 長谷遺跡

- 註1 高橋学氏の御教示による
- 註2 「旧石器考古学」21 旧石器文化談話会 1980
- 註3 直良信夫 「大歳山遺跡の研究」 復刻版 真陽社 1987  
「元住吉山遺跡発掘調査概要」 神戸市教育委員会 1976
- 註4 1988年度調査 調査担当者山口英正より教示を得る
- 註5 石野博信編著「縄文時代の兵庫」 1979  
真野 修 「明石地域の縄文時代」 神戸古代史No.7 神戸古代史研究会 1986
- 註6 1989年度調査 調査担当者谷 正俊より教示を得る
- 註7 養田遺跡調査概報 神戸市教育委員会 1972
- 註8 中村善則・喜谷美宣「養田中ノ池遺跡」 日本考古学年報28 1977
- 註9 西神ニュータウン内遺跡を以下西神N. T. と略記する
- 註10 昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1989
- 註11 「地下にねむる神戸の歴史展」 神戸市立考古館 1980
- 註12 昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987
- 註13 註3に同じ
- 註14 註11に同じ
- 註15 西戸田遺跡スライド会資料 神戸市教育委員会 1982
- 註16 平成元年度スライド会資料 神戸市教育委員会 1989  
1988年度調査 調査担当者山本雅和より教示を得る
- 註17 「神出遺跡 現地説明会資料」 妙見山麓遺跡調査会 1988
- 註18 昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1989
- 註19 昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1986
- 註20 河野道哉・中村善則「堅田神社支群第1・3号古墳」 日本考古学年報27 1976
- 註21 「西神ニュータウン内の遺跡中間報告Ⅰ」 神戸市教育委員会 1972
- 註22 昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1989  
西神ニュータウン内10・11・12地点遺跡 現地説明会資料
- 註23 昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1985  
「西神ニュータウン内の遺跡中間報告Ⅰ」 神戸市教育委員会 1972
- 註24 註11に同じ
- 註25 1989年度調査 調査担当者谷 正俊より教示を得る
- 註26 昭和56～60年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1983～88
- 註27 昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987
- 註28 「繁田古窯址発掘調査報告書」 神戸市教育委員会 1988
- 註29 昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987
- 註30 「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」 兵庫県教育委員会 1982
- 註31 註22に同じ
- 註32 註30に同じ
- 註33 昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1983
- 註34 昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1986
- その他 平成元年度神戸市文化財分布図（西区）による。

## 第3章 調査の概要

### 第1節 基本層序と地形

#### 1. 基本層序

調査対象地は、東西約170m、南北約170mの規模で、約3haの面積となる。この基本層序について単純化することは難しいと思われるが、以下全般の理解のためここでは敢えて基本層序として考えられる条件をそなえたものとして、Aトレンチの層序をモデルとして述べ、次にAトレンチ以外の各トレンチで、観察された点について略述する。

層序は、地表より現耕土、床土、灰色砂泥層の平安時代～鎌倉時代の遺物包含層Ⅰ、褐色砂泥層の弥生時代～古墳時代の遺物包含層Ⅱ（以下Ⅰ層、Ⅱ層と略記）、黄褐色砂泥層の地山（遺構面）となる。

Aトレンチ及び1トレンチ中央部では、Ⅰ層は、大きく2層に分けられる。上層は黄灰色砂泥層、下層は灰色砂泥層でこの2層の間に、黄褐色の粘質層を挟む。旧水田のいわゆる床土と考えられるものである。この遺物包含層は中世以降の田圃形成時の盛土と考えられる。この2層から出土する遺物の時期については特に顕著な相違は認められなかった。

旧水田の床土は、Aトレンチ及び1トレンチ中央部では、比較的明瞭に観察されたが、他の調査区では不明瞭であった。

また調査対象地には、厚さには相違はあるものの、ほぼ全体的にⅠ、Ⅱ層が存在する。

基本的には、地山面が遺構面となる。しかし土石流によって形成されたと考えられる砂礫層が遺構面として各所にあらわれる。後述するが、1トレンチ南部では、地山面が砂礫層となり、地山面が波うつように凹凸が検出された。凹凸はほとんどないが、これと同様の砂礫層が3トレンチ中央部でも検出された。2トレンチ中央部には、Ⅰ、Ⅱ層がほとんどなく現耕土、床土を掘削すると地山面となる。そして2トレンチの東部や西部ではⅠ、Ⅱ層が東端や西端に行くほど厚くなる。

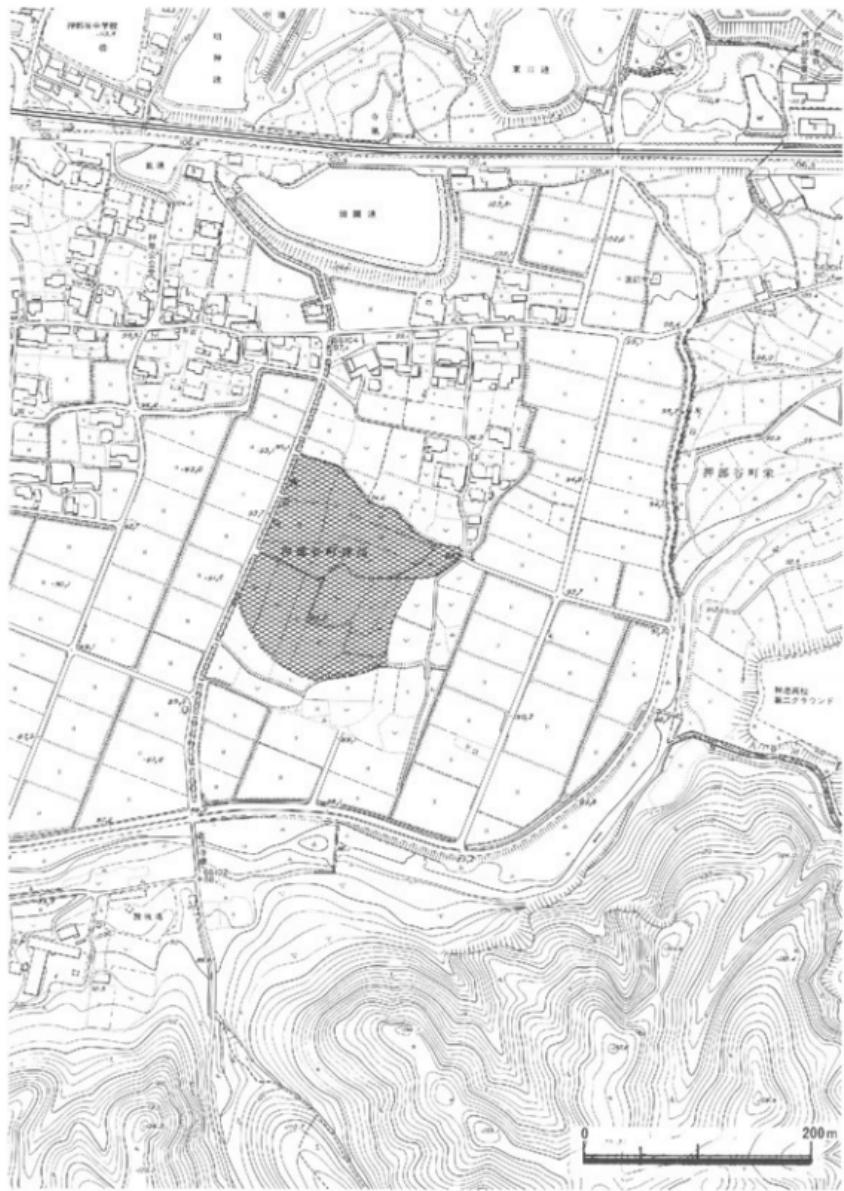
Bトレンチでは、基本的には層序は変わらない。しかし、断割り調査の結果、地山面が東に下がっていくことを確認した。

Dトレンチの地山は、砂を多く含む。この砂っぽい地山の下層は、砂礫混じりの土層となる。

#### 2. 地形

上記のような層序と地山の観察より、調査対象地の地形について述べてみたい。

まず全体の地形は、北に高く南に低くなる。3トレンチの北端は、落差



挿図3 調査地周辺地形と調査対象地

約1mの段丘崖が存在し、1、3、4トレンチの南端は落差約2mの段丘崖となる。東西方向では、東がやや高く西へ徐々に低くなる。ただし前述したように2トレンチ中央部からBトレンチにかけて地山面が高く、東側と西側が低い。

CトレンチからDトレンチかけては、砂礫層の上層にあたる砂層が、東北から南西方向にかけて堆積している。そして3トレンチ中央部から1トレンチ南部にかけて、やはり東北から南西方向にかけて砂礫層が見られる。

また2トレンチ東端で観察されるI、II層の間の砂礫層などは、層序より中世頃の土石流によって形成された層であると考えられる。後述することになるが、他にBトレンチ中央部のSX03は、遺構内の出土遺物より奈良時代頃の所産であろう。またDトレンチのSD03も弥生時代後期以降の洪水によるものと考えられる。

上記の事実をまとめると、弥生時代以前の洪水によって、概ね東もしくは北東方向からの土石流によって段丘が削られたり段丘上に堆積したりして形成された基本的な地形が造られた。そして弥生時代以降にいま述べた幾度かの土石流によって、現状に近い地形となったと考えられる。

また2トレンチ中央部からBトレンチにかけての部分は、幾度かの洪水の影響を受けながらも比較的安定した場所であったと言えるだろう。



挿図写真3 1トレンチ南部礫層検出状況

挿図写真4 3トレンチ中央部礫層検出状況





挿図4 トレンチ配置図

## 第2節 遺構

1. Aトレーニチ Aトレーニチでは、I、II層の遺物包含層と古墳時代の溝状遺構2条と土坑、ピットが検出された。

I層は、0.3~0.4mの厚さがあり、Aトレーニチの出土遺物の大半は、この層より出土している。

SD01は、幅0.7m、深さ0.2mの溝で約18m検出された。断面は蒲鉾形を呈する。出土遺物はわずかで、時期を決め難いが、須恵器出現以前の古墳時代のものと考えられる。

SD02は、幅3.2m、深さ1.0mの溝である。SD01と平行してほぼ東西方向に走る。SD02もSD01と同様に出土遺物はわずかで、時期を決め難いが、同じ頃のものと考えられる。また溝の肩部で検出されたピットは、浅いもので護岸などの杭跡とは考えられない。

他に土坑・ピットが検出されているが、出土遺物が微量で、その性格などは不明である。時期は層序から、SD01・02と同じ頃であろう。

2. 1トレーニチ 幅1m・長さ105mの南北に長いトレーニチで、一部A区と重なる。北部では、遺物包含層と考えられる層が検出されたが、出土遺物はわずかで、遺構は検出されなかった。

断面観察から、北に薄く南に厚い平安時代～鎌倉時代の遺物包含層(I)が堆積している。A区の基本層序で述べたように中世頃の田園形成の盛土と考えられる。

中部では、A区で検出された溝2条とほかに溝1条(SD03)が、検出された。SD03は、SD01・02より上層から切り込んだ溝で、出土遺物より鎌倉時代の溝と考えられる。規模は、幅0.7m、深さ0.5mである。

南部では、基本層序は変わらないが、遺物出土量は減る。地山面が砂礫層となる。この地山面に凹凸が検出された。この凹凸は、土石流によるものと思われ、凹部にII層が堆積している。幅1m足らずの調査区であるため、遺構として捉えられるものか判断できなかった。

挿図写真5 2トレーニチより1トレーニチの  
検出状況(北から)



3. 2 トレンチ 幅1m・長さ162mの東西に長いトレンチである。ピット・土坑・溝状遺構・住居址などが検出された。

基本層序は、西部ではAトレンチ・1トレンチと同様であるが、中央部では、遺物包含層はほとんどなく、耕土・床土直下に遺構面が存在する。トレンチ東部は、西部と同様となる。以上のこととは2トレンチ中央部が、西と東に比べ高くなっていることを示している。

トレンチ西部では、ピット・土坑などが検出された。遺物包含層や遺構からの出土遺物が微量で時期および性格などは、明らかではない。

トレンチ中央部では、堅穴住居址（SB01）・土坑（SK01）・ピットが検出された。

SB01は当初住居址ではないかと推定された。住居址もしくは別の遺構であるかを確認するために、幅1mで南に3m北に5mの南北のトレンチを設けて、調査をおこなった。

この結果一辺約5mの隅円方形住居址と推定され、南隅部では周壁溝が検出され、南床面から柱穴と考えられるものが1カ所検出された。住居址の検出面から床面までの深さは、約0.4mである。住居址内の堆積土は、褐色の泥砂層で、中間にマンガン層がある。床面はほぼ水平である。

周壁溝は、幅約0.1m、深さ約0.05mである。柱穴は、径0.3m、深さ約0.2mで、径0.1mの柱痕が検出された。他に径0.2m足らず、深さ約0.1mのピットが検出された。

また東南辺で土坑が検出された。これは住居址検出面から切り込まれた遺構で深さ約0.3mの皿状の土坑である。特に出土遺物はなかった。

住居址からの出土遺物は、住居址内堆積土からは少量の土師器片が出土したほか、住居址床面からややういた状態で、須恵器甕片、土師器高杯・甕片などが出土した。

SK01もトレンチに北半が検出され、規模等を確認するため、2m×1m拡張して調査をおこなった。

平面形は長径1.8m、短径1.1mの卵型を呈し、北側に深くなり最深部は0.45mをはかる。断面の観察より土坑が掘り込まれて暫く土が堆積した後に、土器が投棄されたようである。また土坑の底面から8カ所直径0.1m、深さ0.1~0.2mの小穴が

挿図写真6 SK01半掘遺物出土状況



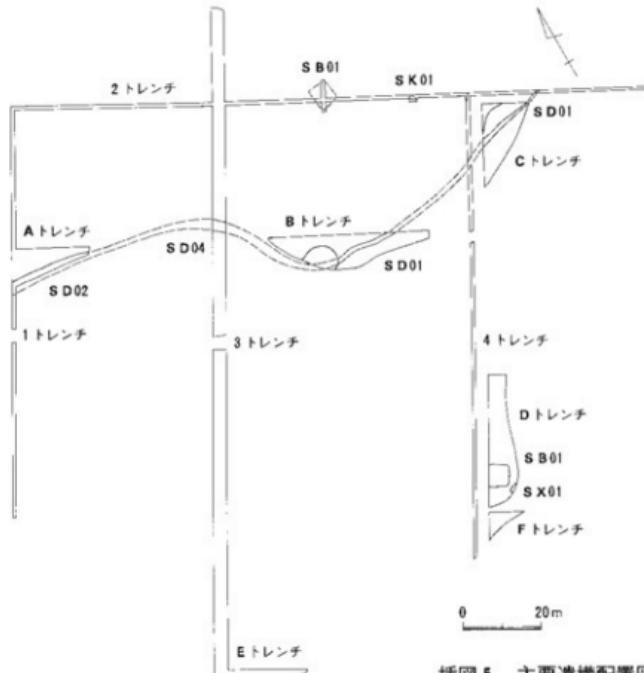
検出された。小穴の底は先すぼまりのようであった。概ね垂直に小穴は検出されるが、やや斜めに検出されるものもあった。径0.1m程度の杭が打ち込まれた痕跡であろうか。平面的には特に規則性をもったようには観察されなかった。

出土遺物は、土師器壺・甕・高杯・小型丸底壺である。

S K 01 の東では、長さ約4m、深さ0.4mの大きな落ち込み状遺構(S X 01)を検出したが、その性格は不明である。遺物より S K 01 の時期と同じ頃であろう。

トレンチ東端では、自然流路と溝が検出された。自然流路は、幅約7.2m、深さ1.5m以上の規模である。調査区の制約があり深さは不明である。この遺構は、2トレンチ、4トレンチ、Cトレンチにまたがって検出された。

2トレンチ東端部では、幅0.4m、深さ0.4mの溝(S D 01)が検出された。断面はU字形を呈する。



挿図5 主要遺構配置図

#### 4. 3 トレンチ

3 トレンチは、幅3m・長さ170mの南北に長いトレンチである。基本層序をトレンチ北部、中央部、南部とわけて略述する。北部は、Ⅰ層Ⅱ層、遺構面となる。中央部は、基本層序の項でも述べたが、砂礫層が検出された。南部は、北部と概ね同様の層序を示すが、Ⅰ層や遺構面を切って砂礫層が観察された。また南部の堆積土は、北部に比べ砂質であった。全般にⅠ、Ⅱ層からの出土遺物は、少量である。

次に北から順に検出された遺構について述べる。北端部では、深さ0.2mの底の平らな落ち込み状遺構（S X 0 1）が検出された。トレンチ北端部で検出されたため、規模は不明である。すぐ北側に1mほど高くなった田圃があり、地山面が急激に高くなるため住居址の存在する空間はない。遺構内より土師器片と須恵器1片が出土した。S X 0 1 挖削後に底面よりピットが5基検出された。ピット2（P 2）より完形の土師器小型甕が出土した。P 2は、一辺約0.5m、深さ0.2mの方形を呈する。小型甕は横倒しの状態で出土した。層序と遺物から古墳時代前期頃と考えられる。

S X 0 1 のすぐ南側で溝（S D 0 1）が検出された。幅0.9m、深さ0.3mの東西に走る溝である。遺構内より土師器片・弥生土器片が出土した。S X 0 1 と大差ない時期の遺構と考えられる。

S D 0 1 の南側から、深さ0.1mで一段下がる落ち込み状遺構があり（S X 0 2）、それより南へ約25mにわたっては、不整形の土坑やピットが検出された。S X 0 2 の出土遺物は、中世の須恵器片と時期不明の土師器片及びサヌカイトフレークである。

S X 0 2 より南の遺構からの出土遺物は、それぞれ少なく時期は決め難いが、S X 0 1 、S D 0 1 の埋土と近似しており大差のない時期の遺構と考えられる。土坑等の性格は現状では不明である。

S D 0 2 は東西方向の幅0.5m、深さ0.1mの溝である。断面は溝鉢形を呈する。出土遺物は微量で、時期は決め難いが、層序より古墳時代の遺物と考えられる。

S D 0 3 は、南北に走る幅0.3m、深さ0.05mの溝で南北約11m検出された。土師器片、須恵器片が少量出土した。遺物より中世と考えられる。

S D 0 4 は、S D 0 3 に直交して切られる幅1.4m、深さ0.7mの溝である。断面は括がったU字形を呈する。土師器が多く出土した。遺物より古墳時代前期のものと考えられる。

S D 0 5 は、幅2.1m、深さ0.5mの東西に走る溝である。堆積土は上層と下層とに大きく2層に分かれる。下層は土師器片とともに、ほぼ完形の高杯が1個出土した。遺物より古墳時代と考えられる。上層は下層埋没後、

北肩に平行して幅0.9m、深さ0.3mの中世の遺物を含む流路に切られている。

S D 0 5 より南側は砂礫層の堆積が南へ約30m続く。砂礫層上面より古墳時代の須恵器片が出土しており、この砂礫層は古墳時代以前の堆積と考えられる。この砂礫層に僅かな凹みがあり、S X 0 6 とした。少量の土師器片が出土した。



挿図写真7 S X 0 5 検出状況（東から）

上記の砂礫層の南側にはS X 0 5 が検出された。深さ0.4mのすり鉢状を呈する落ち込み状遺構で、遺構内より土師器、弥生土器、ミニチュア土器が出土した。遺物より古墳時代前期の遺構と考えられる。S X 0 5 の南側ではピットが2ヵ所検出された。時期、性格は不明である。

S D 0 6 とS X 0 7 は、ともに深さ0.05mの程度の浅い溝状遺構と落ち込みである。堆積土は両者同様に砂であった。両者ともに出土遺物はなく、時期性格は不明である。

S D 0 7 は幅1.2m、深さ0.1mの東西に走る溝である。S D 0 8 は幅1.8m、深さ0.3mのS D 0 7 と平行して走る溝である。S D 0 9 は幅1.3～2.4m、深さ0.1mの溝である。方向や規模等から、S D 0 7・0 8・0 9 はそう時期差のない同一の溝が流路を変えたものと考えられる。少量の出土遺物から弥生時代終末から古墳時代初めの頃と考えられる。

S D 1 0・1 1 は当初弧を描いて流れる溝と考えていたが、調査の結果、堆積が大きく2度に分けられ、半円形に検出される落ち込み状の遺構となつた。特に遺物の出土はなく、時期は不明である。

S D 1 2 は幅0.8m、深さ0.3mの溝である。土師器甌と土師器片が出土した。遺物より古墳時代前期と考えられる。

S D 1 3 は幅0.7m、深さ0.4mの溝である。S D 1 2・1 3 は少量の出土遺物である土師器片から古墳時代前期頃と考えられる。



挿図写真8 3 トレンチ南部の遺構検出状況

5. B トレンチ B トレンチの層序は、I、II層、遺構面となる。遺構は、溝3条、落ち込み状遺構、ピット等が検出された。



挿図写真9 SD 01断面（西から）

SD 01は幅1.1m、深さ0.8mの北東から南西方向に検出された溝である。断面はV字形を呈する。B トレンチ内で18mの長さにわたって検出された。この溝は、C トレンチの項でも述べるが、2、C、4 トレンチでも断面V字形の同様の溝が検出された。2 トレンチ東端検出地点から、C、4 トレンチを経てB トレンチ南西部まで全長約70mに渡って検出された。

溝内の堆積土は上、中、下層と3層に分けられる。3層は似通った土であり、それぞれ比較的均質な土であった。断面にはラミナ状のものは観察されなかった。上層より須恵器杯蓋、中層からは土師器高杯・壺片等と滑石製双孔円板が出土した。出土遺物は少量であった。

以上のことから、水を流すことを目的として掘られたものではないと推定される。検出状況や溝の断面形から溝の北側と南側とを区画することを目的として掘られたと考えられる。また堆積土の均質性から短時間の内に埋ったことが考えられる。さらに3 トレンチ SD 04 やA トレンチ SD 01は、溝の断面形や溝内堆積土、また出土遺物からB トレンチ SD 01とつながる可能性が高いと考えている。



挿図写真10

B トレンチ全景

(南から)

S D 0 1 はトレンチ中央部で幅 5 m、深さ 0.8 m の弧状をなす大きな落ち込み状遺構 (S X 0 3) で切られている。遺構の断面は、砂層と疊層の互層となっており、砂層にはラミナ状のものが観察された。幾度かの洪水により形成され埋没した流路状の遺構と考えられる。この遺構内より古墳時代土師器・甕・高杯とともに奈良時代から平安時代ころの須恵器杯等が出土している。S X 0 3 はこの時期以降に埋まったものとおもわれる。

トレンチ東端には深さ 0.3 m の中世の土師器、須恵器を少量含む落ち込み状遺構 (S X 0 2) が検出された。この南側あたりから段丘が一段さがるようである。

トレンチ西辺では幅 1.8 ~ 0.6 m、深さ 0.1 m の溝 (S D 0 3) と深さ 0.4 m で半円形に検出された落ち込み状遺構 (S X 0 1) がある。S D 0 3 は、出土遺物が無く時期は不明である。S X 0 1 は、少量の遺物から古墳時代のものと考えられる。

この他にトレンチ南辺で S D 0 2 が検出された。南流する溝で幅 0.5 ~ 1.2 m、深さ 0.3 m である。遺構内より中世の土師器、須恵器が出土した。

B トレンチについては、北辺部に東西に断割を行なった。調査は、幅 1 m、長さ約 20 m のトレンチを設けて行った。その結果、B トレンチ東半の遺構検出面は地山であるが、西へ地山面は徐々に下がる。落ち込み状遺構と溝状遺構が検出された。少量ながら、遺構内より弥生土器が出土した。

この断割調査により、2 トレンチ住居址から B トレンチにかけて南に伸びる舌状の高まりが存在し、この高まりから西に向かって徐々に地山が下がって行くようである。

註 工事の掘削による影響はほとんどないが、下層遺構の存在が予測され、下層の状況を把握するために調査をおこなった。



挿図写真11 B トレンチ段割状況  
(西から)

6. Cトレーニチ 溝3条とビットが検出された。SD01は、南西流する溝で幅1.1m、深さ0.7mの断面V字形を呈する。隣接する2、4トレーニチでも検出されている。これらを含め約32m検出された。溝内より古墳時代土師器、壺、甕、高杯が出土した。この溝は前項でも述べたが、方向と溝内堆積土と断面形状から4トレーニチの西隣Bトレーニチに連続するものと考えられる。

SD02は幅1.4m、深さ0.2mの溝である。やや弧を描きながら南流する。溝内より古墳時代土師器甕片が出土した。

SD03は、SD02と同様に北東から南西に弧を描くように流れる幅7.2m、深さ1.5m以上の流路である。上、中、下の3層に大別することができる。上層は古墳時代始め頃の遺物が出土した。中層は砂泥層で弥生時代後期の遺物を含み、下層は砂層でほとんど遺物は検出されなかった。またこの流路の西側の肩は2トレーニチと4トレーニチ内で確認された。砂層の堆積状況から自然の流路ではないかと考えられる。

SD02とSD03上層の出土遺物が接合する。またSD02とSD03が近接することからSD03の溢流が、SD02を形成したと考えられる。

7. Dトレーニチ Dトレーニチでは、中世の溝5条と古墳時代落ち込み状遺構・弥生時代住居址・ビットが検出された。

中世の溝は幅0.3m、深さ0.05mで、5条検出された。溝は幅、深さともにほぼ同じような規模をもち南流する。遺構内堆積土もほぼ同質の灰色泥砂で、出土遺物も同様に土師器、須恵器片が出土している。中世の水田にかかるわる水路の痕跡と考えられる。

住居址は、西辺部の一部は調査できなかったが、一辺6.4mの中央に炉をもつ隅円方形住居址である。住居址の検出された水田は、南北に細長く、東西の水田より僅かに高くなっている。低平な尾根上に立地するようである。住居址の深さは、0.4mである。周壁溝は、検出されなかった。南辺、北辺、東辺に地山を削り粘質土を貼ったベッド状遺構をもつ。ただし東辺は南部で欠けている。また南辺の東側には、一辺約0.9m、深さ0.2mの三角形の凹みがある。欠落部や凹みは、住居址の入口であろうか。ベッド状遺構の床面からの高さは、0.2mである。

床面から直径0.2mの5カ所のビットが検出された。4カ所の組合せは容易に支柱穴であると判断されるが、他の1カ所は、0.05mと非常に浅くその性格は不明である。支柱穴の深さは、0.15~0.4mで、1カ所を除いて底は地山に到達している。柱痕は検出されなかった。

中央炉は、住居址中央に地山を掘削して穴を穿った後に住居址床面に粘

質土を敷き、同時に穴の周間に粘質土を盛りあげて炉を設けている。中央炉はほぼ円形で、直径2.1m、深さ0.6mである。中央炉の周囲は、盛りあげた土と炉内より掻き出した灰と炭で、ドーナツ状の高まりが検出された。

中央炉を中心に東西、南北方向に床面の断ち割りをおこなった。この結果、当初検出した床面より約0.1m下に、建築当初の床面が存在し、住居址の造り替えがあった事が判明した。最初の床面の存在により、当初検出した床面をすべて剥がし調査をおこなった。以下当初検出した床面を持つ住居址を上層、断ち割り後判明した最初の床面を持つ住居址を下層の住居址とする。

下層の床面は、地山を掘削して黄色の粘質土を敷いている。しかし上層の床面に比べ縮まらずまた砂質であった。また下層の中央炉は、先に述べた上層の中央炉と同じ方法で造られている。そして下層の中央炉は、下層の中央炉とほぼ同じ位置に造られている。ただし、下層の中央炉の形状は、東西0.9m、南北1.5mの南北に長い椭円形で、深さ0.5mで、上層に比べ小規模である。

次に上層の床面を調査したが、下層の支柱穴は検出されなかった。またベッド状遺構は、下層の床面から立ち上がり、特に造り替えはなかったようである。

これらより中央炉以外は、基本的に下層のものを踏襲して上層の住居を営んだようである。

また断ち割りにより中央炉は、下層も上層も炉内より灰や炭を何度も掻き出したようで、灰と炭が互層となっていることが観察された。

住居址内からの出土遺物は、壺、甕、高杯、鉢などの土器である。住居址内堆積土からの出土遺物は、比較的少量であった。また上層の床面を剥がした際の出土遺物は、さらに少なく数片であった。上層床面の遺物出土状況は、東辺のベッド状遺構上で甕片が東辺の壁に接して押し潰されたように検出された。また床面から完形の鉢や高杯片、甕片が出土した。

挿図写真12 SB01中央炉段割状況



住居址南側で検出されたSX01は、西に下がる深さ0.3mの落ち込み状遺構である。全体の形状は、調査区外にひろがるため形状は不明である。出土遺物は古墳時代前期の土器壺、甕、高杯である。

8. 4トレンチ 幅1m・長さ120mの南北に長いトレンチでC・Dトレンチに近接する。  
層序は、I、II層、遺構面となる。



挿図写真13 4トレンチSD01

検出状況（南から）

Cトレンチでも述べたように北端で弥生時代の自然流路SD03・古墳時代前期の溝SD01が連続して検出された。SD03とSD01の間では、古墳時代前期の落ち込み状遺構が検出された。

SD01から南へ約50mは、3トレンチと同様に中世の薄い遺物包含層の下に砂礫層の堆積があり、断面調査を実施したが遺構遺物は検出されなかった。

砂礫層の終わるDトレンチ西側あたりから、弥生時代のピットや落ち込み状遺構が検出された。

9. Eトレンチ 3トレンチ南端東側に位置する調査区である。層序は、先に述べた3トレンチ南部の状況とはほぼ同じである。段丘端で包含層からの遺物出土量は少なかった。古墳時代の深さ0.1mの浅い落ち込み状遺構が検出されたにとどまる。



挿図写真14 Eトレンチ全景（西から）

落ち込み状遺構は、一部を除いて、南に下がっており自然地形の痕跡とも考えられる。

10. Fトレンチ Dトレンチすぐ南側段丘の末端部にあたり、中世の遺物包含層がわずかに残存していたのみで遺構の検出はなかった。

### 第3節 遺物

1. 各トレンチ 遺物については、主だった包含層・遺構ごとに図示し、基本的には実測  
遺物包含層 図を示した遺物について述べることにする。

#### 1) Aトレンチ遺物包含層

遺構の項でも述べたが、I層は厚く出土遺物量の大半は、奈良～平安時代の遺物で鎌倉時代の遺物がこれにつぐ。須恵器杯・壇・鉢・壺・甕、土師器皿・甕、青磁、白磁、瓦が出土した。その他に古墳時代須恵器杯身・杯蓋、弥生土器、サスカイト片が少量出土した。II層は薄く残存していた。弥生時代～古墳時代の土器が少量で細片であった。

比較的大きな破片をピックアップして図化した。1、2、3は古墳時代後期の須恵器杯蓋・杯身、4、5、6は奈良～平安時代にかけての須恵器杯蓋・杯身、7、8は平安時代以降の須恵器瓶子、9は鎌倉時代の須恵器壇である。7、8は、胎土に砂粒を微量含むが良好である。7は内外面に釉がかかるが、8には施釉はない。7の色調は灰白色、8は暗灰色である。

各トレンチ包含層は、基本的には、中世の遺物を主体とし、古墳時代から平安時代にかけての遺物も含む。ここでは図示しなかったが、宝珠つまみを持つ須恵器杯蓋、青磁、白磁片も出土している。

#### 2) 3トレンチ遺物包含層

3トレンチでの遺物包含層からの出土遺物量は少なかった。I、II層の遺物を羅列すると、中世では須恵器壇・鉢・甕・土師器鍋、陶磁器天目茶壇など、古墳時代では須恵器杯・壺・甕、土師器壺・甕、高杯など、また弥生土器などがある。図示すべきものとして須恵器杯身2個とミニチュア土器1個を掲げる。

10は、3トレンチ北部包含層出土の須恵器杯身である。胎土はやや粗く、色調は青灰色である。6世紀前半代のものであろう。11は、3トレンチ南部遺物包含層出土の同じく須恵器杯身である。胎土は良好、色調は内面淡褐色外側淡灰色で、焼成はやや甘い。内面に同心円叩きが残る。時期は7世紀代であろう。12は、土師器ミニチュア土器である。3トレンチ南部遺物包含層から出土した。胎土は少量の砂粒を含み、特に良好とは言えない。色調は、淡赤乳褐色で内面はやや赤く、外側には黒斑がある。口縁部は、欠けており、やや尖り気味の底で、内面に指おさえ痕がある。後述するが、3トレンチ南部S X 0 5でも土師器ミニチュア土器が出土している。

#### 3) Bトレンチ遺物包含層

13～15は、8世紀以降の須恵器杯蓋・杯身である。14は、胎土は精良、

焼成は堅緻、色調は黒灰色である。丁寧な撫でと底部にはヘラ削りを施す。

16は土師器小型壺である。全体の約1/2程度残存する。胎土は良好で径1mm程度の砂粒を少量含む。色調は乳褐色である。調整は口頸部に丁寧に撫でを施す。内面はやや粗い撫で、外面は粗い刷毛目調整を施す。

17は、須恵器杯蓋である。胎土は良好、焼成はやや甘く、色調は灰色である。6世紀前半代のものであろう。18は須恵器ミニチュア高杯である。胎土に少量の砂粒を含むが比較的良好である。時期については不明である。19は須恵器甕である。胎土は径1～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好、色調は灰色である。頸部にやや直線的な波状文を施す。体部内面は同心円文を擦り消している。6世紀前半以前のものと考えられる。

以上包含層の遺物について記述したが、中世に属する須恵器塙等も出土しているが、いずれも小破片で図化できなかった。これに対し奈良時代と古墳時代に属する遺物が、比較的大きな破片で出土している。

また18のミニチュア高杯の出土は、後述する滑石製双孔円板やそれに関わる祭祀的な意味をもつてであろうか。

#### 4) Eトレンチ遺物包含層

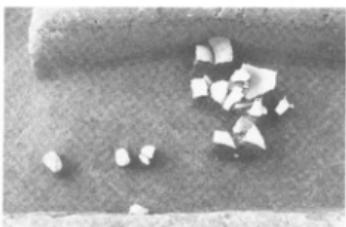
Eトレンチ出土遺物で、実測できたものは、20の1点のみであった。20は屈曲する口縁をもつ甕であろうか。口径は復元径28cmで、比較的大きなものである。色調は赤褐色で、胎土に径1mm程度の砂粒を少量含み、その砂粒はクサリ礫や石英、長石などである。調整は全体に土器の残存状況は悪く、外面の撫で調整が僅かに残る程度である。色調、胎土からは在地的な要素があり、器形からは山陰地方の影響を受けるものであろうか。時期は古墳時代前期と考えられる。

#### 2. 2トレンチ 1) SB01

遺構内出土遺物 住居址一棟分を完掘したのではないため、住居址からの出土遺物は全体に少量である。住居址内堆積土からも出土遺物は少なく、住居址床面からやや浮いた状態で、須恵器甕片、土師器高杯、甕片などが出土した。

21～23は、土師器で全体に残存状況が悪く、調整が不明な部分が多い。21は、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は悪く、色調は淡乳褐色である。22も同様に内外面の表面が剥離しており、調整が不明な部分が多い。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は悪く、色調は赤褐色

挿図写真15 SB01遺物出土状況



である。脚部内面はおそらく削りを施しているとみられる。23は、内外面に僅かに刷毛目調整が残る。杯部を外方へ張り出し、接合痕が段状に残る。口縁部は欠損している。胎土は良好、色調は、内面淡赤褐色、外面乳褐色である。この他に図示しなかったが、須恵器甕片（24）がある。胎土は少量の砂粒を含み良好で、焼成はやや悪く、色調は灰白色である。外面に部分的に格子目叩きを有し、内面は叩きを丁寧に磨り消している。

上記が住居址内のおもな出土遺物である。これらの遺物より5世紀後半の時期が考えられる。

## 2) SK01

出土遺物は、少量の炭片と土器で、土器は須恵器を含まず、すべて土師器である。器種は、壺、甕、高杯、小型丸底壺である。総個体数は、約35個体ほどである。

25は壺であろうか。土器の残存状況が悪く調整は不明である。胎土に径1mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成はやや悪く、色調は茶褐色である。26は二重口縁を持つ壺であろうか。口縁部に叩きが残るが、丁寧に撫でて仕上げる。内面は肩部から削りをおこなう。胎土に径1mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好である。色調は茶褐色で他の個体に比べやや黒っぽいものである。27は外面は丁寧な撫で、内面は刷毛調整を施す壺であろうか。胎土は良好で、径1mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。色調は淡乳褐色、焼成は良好である。内面に黒斑がある。28は口縁が上方に伸び、肩がはる壺と思われる。口縁部は丁寧な撫でを施す。体部外表面は刷毛が少し残るが、撫で仕上げである。体部内面は削りを施す。胎土は良好で、径1~2mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好である。色調は赤黒い乳褐色である。

29~34は甕である。29はやや土器の残存状況が悪いものである。体部外表面は刷毛調整を施す。口縁部は撫でであろう。頸部内面には粘土紐の接合痕が残り、体部には削りを施す。胎土に径1~3mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成はやや悪く、色調は淡茶褐色である。30は口縁端部以外は、刷毛調整をおこなう。頸部に接合痕が残る。胎土は良好で、径1mm程度の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好で、色調は淡茶褐色である。31は外面肩部に刷毛が残るが、撫でにより仕上げる。口縁部内面にも刷毛調整をおこない、内面肩部から削りをおこなう。胎土に径1mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好である。色調は茶褐色である。32はやや肩部がはりだす甕である。体部外表面は

刷毛調整、他は丁寧に撫でを施す。胎土に径1mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好、色調は乳褐色である。33は、外面口縁部撫で体部は刷毛調整である。内面は口縁部は粗い刷毛、肩部撫で、体部には削りを施す。色調は淡乳褐色、焼成は良好である。胎土に径1~2mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好、色調は乳褐色である。34は外面は刷毛と撫で調整をする。内面は口縁部撫で体部は削り施す。胎土に径1~3mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好、色調は暗乳褐色である。

35~38は小型丸底壺である。小型丸底壺は図化した以外に少なくとも4個体以上あるものと思われる。35は口縁部のみである。胎土は精良で、色調は淡乳褐色、焼成はやや悪い。36は口縁部と内面は丁寧な撫でを施し、体部下半部は粗い撫でである。胎土に径1mm以下の長石、石英、チャート、クサリ礫を含み、良好である。焼成は良好、色調は淡乳褐色である。37は頸部に刷毛調整がみられる。全体に撫で調整をするが、頸部から底部にかけて撫では粗雑になる。胎土、色調、焼成は36とほぼ同様である。38は外面下半部は刷毛調整、他は撫で調整である。胎土は精良、焼成は良好である。色調は外面淡乳褐色、内面黒褐色である。

39~44は高杯である。図化したもの以外に5個体程度の破片がある。39は杯底部は平らで段を少し残して外上方に拡がるものである。内外面ともに丁寧に撫でて仕上げる。胎土は良好で径1~2mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。色調は淡乳褐色、焼成はやや悪い。40は杯部下半部を削るものである。口縁部は丁寧に撫てる。胎土に径1mm以下の長石、石英、チャート、クサリ礫を含み、良好である。焼成は良好、色調は淡乳褐色である。41は脚部で杯部との接合痕を残す。調整は撫でである。脚部内面は箇削りをおこなっているようである。胎土は良好で、径1~2mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成はやや悪く、色調は淡乳褐色である。42は杯部は丁寧な撫で、杯部から脚部にかけて刷毛調整がみられる。脚部はやや袋状に膨らみがあり、内面に削りを施しているようである。胎土は良好で、径1mm前後の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好、色調は淡乳褐色である。43は外方に拡がる口縁部を持つもので、擬口縁を造り口縁部を付け足し、帯状の突帯をつける。口縁部は丁寧な撫で、突帯と口縁部の間は刷毛の後撫である。内面は箇磨きを施す。44は丸い杯部を持つもので、口縁部を外方に拡張するため、突帯を持つような擬口縁を造りそこに口縁部を付け足す。土器の残存状況が悪く調整は不明な部分が多いが、口縁部は刷毛調整をした後に撫でを施す。胎土に径1~5

mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。色調は淡赤褐色で、焼成はやや悪い。

以上述べたことから二三気付いた点について触れてみたい。まず胎土に基本的に長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。色調は乳褐色から赤褐色系を呈する。次に頸部内面の調整は、29、31、34などでは粗雑な撫で調整である。さらに甕は外面の造りに比べ内面は一様に粗雑な調整で終わっている。またこれら土壤内の遺物でやや胎土が異なるのは26のみであるが、26を含めて胎土や調整に共通する点が見出され、在地的な要素を持つ土器群と思われる。時期は5世紀中頃と考えられる。

### 3. 3 トレンチ 1) SX 01 内 P 2 捜査写真16 SX 01 内 P 2 遺物出土状況

遺構内出土遺物 45は、3トレンチ北端部で検出され

た深さ0.2mの底の平らな落ち込み状

遺構（SX 01）の底面に検出された

ピットからの出土遺物である。

完形品で、体部外面は、刷毛目調整

を行った後、軽い撫でを施す。口頭部は撫でを施す。内面は底部は刷毛目調整、体部は丁寧に撫でを施す。口縁部内面に明瞭な押圧痕が1ヵ所観察された。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は淡乳褐色である。古墳時代前期に属すると考えられる。

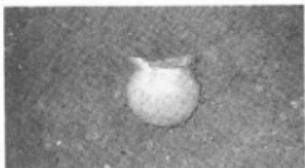
### 2) SD 0 4

SD 0 4 より土師器の細片が一塊の状態で出土した。しかし個体としてのまとまりは見られず、図化しうるものは図に示した土師器壺と甕の2点のみであった。46は、遺構内の遺物と包含層内の破片が接合した。外上方にのびる口縁をもつ土師器壺である。口縁端部は撫で調整で、外面は撫での後鏡磨きを施す。内面はやや粗雑な撫で調整である。胎土に1~5mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含むが、良好な胎土である。焼成は良好、色調は淡赤褐色である。

47は、肩部に刷毛目調整によって消されていない叩きが残る。体部には刷毛目を施す。口縁部は撫でを施し、体部内面は刷毛目調整をする。胎土に1~5mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好、色調は、外面淡赤褐色、内面淡乳褐色である。遺物より古墳時代前期のものではないかと考える。

### 3) SD 0 5

48は、杯部は約半分、脚部は完存する高杯である。やや残存状況は悪く調整の不明な部分がある。杯部内外面、脚部外面は、撫でを施す。脚部内



面は調整不明である。口縁部、胸部端部は丸くおさめる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡茶褐色である。

#### 4) SX 0 5

出土遺物は、何れも細片で図示できるものが少なかった。49は土師器高杯である。外面に刷毛目調整の後、撫でを施す。内面は、器面が剥離しており調整は不明である。胎土に少量の砂粒を含むが良好である。径1mm内外の長石、石英、チャート、クサリ礫である。焼成はやや悪く。色調は赤褐色である。50は土師器ミニチュア土器で、復元径約5.8mmの手捏ね土器である。胎土に径1mm内外の長石、石英、チャート、クサリ礫を少量含む。焼成は良好、色調は赤褐色である。先の3トレンチ遺物包含層で触れたミニチュア土器もSX 0 5付近で出土している。

#### 5) SX 0 6

51は口径20cmの土師器壺であろう<sup>b3</sup>。口縁端部は、わずかに上方へ拡張され、丸くおわる。胎土は良好で、内外面とも丁寧な撫でが施されている。焼成も良好で、色調は淡赤褐色である。

#### 6) SD 1 2

図化できたものは、52の土師器1点のみである。全体に残存状況は、悪い。体部には刷毛目調整が施され、口縁部は、丁寧に撫でている。内面の調整は不明である。胎土に径1mm内外の長石、石英、チャートを少量含む。焼成はやや悪く、色調は淡赤褐色である。体部に穿孔がある。外側からの打撃によるものではなく、工具の回転により穿孔している。ただし穿孔部分で土器が割れているため明確でないところがある。

### 4. Bトレンチ 1) SX 0 3

遺構内出土遺物 53、54は須恵器杯である。53は、胎土は良好、色調は灰色である。54は、53に比べやや粗い胎土で色調は灰色である。時期は8世紀であろう。55も須恵器杯である。胎土は良好、色調は灰色である。外面に比べ内面の撫で調整は丁寧である。時期は9世紀と考えられる。56は6世紀後半の須恵器杯蓋である。胎土は少量の砂粒を含み、色調は内面灰色、外面黒灰色である。57は土師器高杯である。脚部外面は撫で、内面は削り調整である。時期は古墳時代前半である。

58、59は土師器壺である。58、59とも土器の残存状況が悪く、調整は不明である。58は、胎土は径1~2mm程度の砂粒を含み、色調は赤褐色である。59は58に比べ胎土は良好で、色調は乳褐色である。

#### 2) SD 0 1

溝の規模に対して、出土遺物は少量であった。また2、4、Cトレンチ

でも遺物の出土量は少量であった。最上層より須恵器杯蓋、中層からは土師器高杯、甕片等と滑石製双孔円板が出土した。

60は、天井部全体にはぼ箒削りを、口縁部には丁寧な撫でを施す。内面も丁寧に撫で、内面天井部には一方向の撫でがみられる。胎土には少量の砂粒を含み良好である。色調は外面灰色、内面セビア色を呈する。焼成は良好である。

61は、土師器甕である。内外面とも撫でを施す。口縁端部は少し面をもつようである。胎土にはわずかに砂粒を含むが良好である。色調は淡乳褐色である。焼成は良好である。

滑石製双孔円板（62）は、直径27mm、厚さ3mm、穿孔の直径2~4mm、重量は4.1gである。石材の色調は銀鱗状に光る緑灰色である。穿孔は片側から行なわれたようである。端面は、3~9mm毎に研磨し、円形に形づくったようである。また表面にも研磨痕が見られる。

最上層の須恵器杯蓋より、5世紀末にSD01は埋没したと考えられ、これより以前に溝が機能していたものと思われる。また滑石製双孔円板の出土から溝及びその周辺で祭祀が行われたことが、想起される。

ここで参考として神戸市内の滑石製品出土遺跡を一覧表にして掲げた。この一覧表より読み取れる点として、滑石製品が出土する遺跡の時期が5世紀後半から6世紀前半に集中していることがまずあげられる。

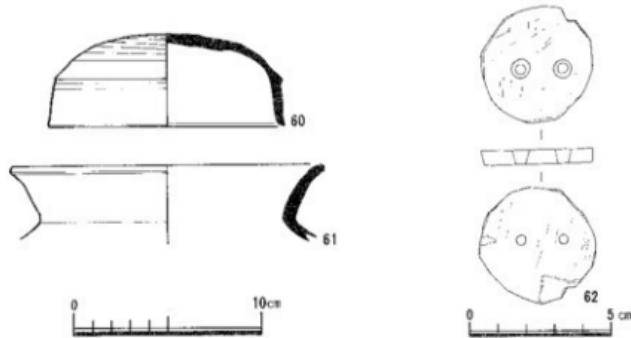
またこれらの遺跡は大きく3つのタイプに分けられるようである。まず、古墳そのものにおける祭祀として捉えられるタイプ（住吉宮町東古墳）、つぎに滑石製品の生産工房として捉えられるタイプ（新方遺跡）、3番目として集落址で祭祀用具として用いられたタイプ（松野遺跡）の3タイプである。押部遺跡は、3番目のタイプとして捉えられることがわかる。

明石川流域でのこの時期の他の遺跡と比較してみるとその地域における先進的な位置をしめる遺跡（吉田南遺跡、玉津・田中遺跡）が浮かび上がる。後述することになるが押部遺跡は上記の先進的な位置をしめる遺跡と比べると内容については見劣りするが、明石川上流域における一定の位置を持つ遺跡として捉えられよう。

また、意識的に掘削された溝に囲まれた高台に住居址が検出されることは、2トレンチとBトレンチの間に数棟の住居址が存在することが容易に推定できよう。この推定が妥当であれば、明石川上流域における押部遺跡の位置は、やはり核もしくは拠点的な集落として考えられよう。

市内滑石製品出土遺跡一覧表

遺跡名	区名	出土遺物	共伴遺物	出土遺物	時期	註
西神NTN 12地点遺跡	西区	筋鉢車	須恵器・土師器	土坑	6C初頭	6
玉津・田中 遺跡		勾玉・臼玉・劍形 模造品	須恵器・土師器	河道	古墳時代	18
平野地区		臼玉 双孔円板	土師器 土器	住居址内土坑 溝	5C後半 5C後半	19
居住遺跡		筋鉢車	—	包含層	—	2
新方遺跡		勾玉・管玉・臼玉		住居址	5C末	2
吉田南遺跡		有孔円板 筋鉢車	住居址	住居址 後期	古墳時代	7
出合遺跡		筋鉢車・勾玉		住居址	5C前～後半	9,10
白水遺跡		双孔円板	土師器(小甕从属)			18
五色塚古墳	垂水区	了持勾玉・臼玉		くびれ部	5C	11
松野遺跡	長田区	劍形模造品		包含層	5C中葉	8
神楽遺跡		算盤玉形筋鉢車・ 装身具	須恵器・土師器 韓式系土器	溝	5C末	4
		双孔円板・勾玉・ 臼玉	須恵器・土師器	井戸	古墳時代 中期後半	6
生田遺跡	中央区	臼玉 有孔円板 筋鉢車	須恵器・土師器	住居址 掘立柱建物	5C前半 6C初め	12
郡家遺跡	東灘区	有孔円板・勾玉・ 臼玉	須恵器・土師器	土坑	5C後半	1
		筋鉢車 滑石原石	須恵器 須恵器	住居址 住居址	6C前半	3
		筋鉢車	須恵器	落ち込み状 遺構	5C後半	4
		有孔円板	須恵器・土師器	溝	古墳時代後期	4
		有孔円板 勾玉	須恵器 須恵器・土師器	墓 住居址	6C前半 6C初頭	5
		臼玉	須恵器・土師器	落ち込み状 遺構		6
		双孔円板	須恵器・土師器	土坑	5C後半	13
住吉宮町 遺跡		双孔円板・筋鉢車	須恵器・土師器	住居址	5C後半	
		双孔円板	鐵製直刀	住吉東古墳	5C末	14
		臼玉	—	中世井戸		15
		双孔円板・勾玉 臼玉	土師器	溝	5C前半	16
森北町遺跡		双孔円板・臼玉	須恵器・土師器	河道	5C後半	17



挿図6 BトレンチSD01出土遺物実測図

市内滑石製品出土遺跡一覧表註

- |     |  |                   |      |
|-----|--|-------------------|------|
| 註1  | 昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報   | 神戸市教育委員会          | 1983 |
| 註2  | 昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報   | 神戸市教育委員会          | 1985 |
| 註3  | 昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報   | 神戸市教育委員会          | 1986 |
| 註4  | 昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報   | 神戸市教育委員会          | 1987 |
| 註5  | 昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報   | 神戸市教育委員会          | 1988 |
| 註6  | 昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報   | 神戸市教育委員会          | 1989 |
| 註7  | 吉田南遺跡現地説明会資料V  | 吉田片山遺跡調査団         | 1978 |
| 註8  | 松野遺跡発掘調査概報   | 神戸市教育委員会          | 1984 |
| 註9  | 昭和57年度兵庫県埋蔵文化財年報   | 兵庫県教育委員会          | 1985 |
| 註10 | 昭和58年度兵庫県埋蔵文化財年報   | 兵庫県教育委員会          | 1986 |
| 註11 | 史跡五色塚古墳復元・整備事業概要   | 神戸市教育委員会          | 1982 |
| 註12 | 生田遺跡現地説明会資料  | 神戸市教育委員会          | 1988 |
| 註13 | 郡家遺跡御影中町地区第4次調査<br>現地説明会資料大手前女子大学  | 大手前女子大学           | 1989 |
| 註14 | 住吉宮町遺跡現地説明会資料  | 神戸市教育委員会          | 1988 |
| 註15 | 森北町遺跡現地説明会資料   | 瀬戸内考古学研究所         | 1988 |
| 註16 | 森北町遺跡現地説明会資料<br>大手前女子大学内森北町遺跡調査会   |                   | 1989 |
| 註17 | 森北町遺跡現地説明会資料(第8次)  | 神戸市教育委員会          | 1988 |
| 註18 | 兵庫県教育委員会大平茂氏の御教示による<br>共同研究「古代の祭祀と信仰」  | 付図(33頁)参照         |      |
| 註19 | 平成元年度埋蔵文化財専門職員研修会資料<br>「豎穴住居址について」   | 兵庫県教育委員会          | 1990 |
| 註20 | 上記の他に大平茂「祭祀遺物からみた古墳時代の播磨地方」<br>を参照した。またこの一覧表の作成については兵庫県教育委員会大平茂氏<br>より多くの御教示と資料の提供をえた。 | 今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢 | 1990 |

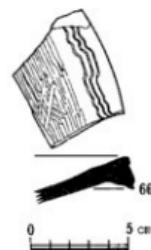
## 5. C トレンチ 1) SD 0 2

遺構内出土遺物 63は、古墳時代土師器甕である。SD 0 2とSD 0 3上層出土の破片が、接合した。口頸部は屈曲せず曲線的に曲がり、口縁端部は丸くおさめる。口頸部及び内面は丁寧な撫でを施す。体部外面は、肩部には叩きが残るが、腹部では荒い撫でを施す。内面は刷毛を消す程度の撫でである。胎土に径1mm大の砂粒を含むが、良好である。色調は淡乳褐色で、焼成は良好である。

2) SD 0 3

SD 0 3では、64、65を図示した。64は、小型鉢型土器で、全体に残存状況が悪いが、外面にわずかに叩きが残る。底部には指おさえ痕が残る。口縁端部はやや尖り気味におわる。内面の調整は不明である。胎土は良好で、色調は淡乳褐色で、焼成はやや甘い。

65は、大型の鉢であるろうか。口縁端に不明瞭な凹線をもつ。全体に残存状況が悪く内外面とも調整は不明であるが、外面頸部にわずかに刷毛目が残る。胎土は砂質で、径1mm以上の砂粒は含まれず、全体に細かい砂が固まっている印象をもつものである。色調は乳褐色で、焼成はやや甘い。ほかに壺型土器（66）がある。口縁端部に2条の凹線を持ち、内面端部には粗悪な波状文を施し、内面調整はヘラ磨きである。外面端部は撫で、他は刷毛調整である。



插図7 SD 0 3出土  
土器実測図

これらの遺物のみから速断し難いが、SD 0 3は弥生時代中期に遡る可能性をもつと考えられる。

## 6. D トレンチ 1) SB 0 1

遺構内出土遺物 住居址内より壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器が出土した。ここでは上層の住居址床面もしくは床面直上から出土した遺物について図化した。

67、68、69は、甕形土器である。67は体部から口頸部にかけて叩きがあり、口縁部及び内面は、撫でを施す。胎土に径1mm程度の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好で、色調は、外面淡茶褐色、内面淡乳褐色である。68は小型甕形土器である。体部外面は叩き、内面は刷毛調整を施す。口縁をつまみ上げ、端面を形成する。端面には擬凹線を施す。胎土に径1~2mm程度の長石、石英、チャートを含む。焼成は良好で、色調は、茶褐色である。69は口縁部まで土器が残存していないので、判断し難いが小型甕形土器とする。68に比べ底部が小さく先窄みの印象を持つもの

である。底部には指押さえ痕があり、外面は撫で調整、内面は刷毛調整である。

70、71、72は壺形土器である。70は口縁部を上下に拡張し、擬凹線を施した後円形浮文を付し、口縁端部には刻み目をつける。口頸部外面は笠磨き、口縁部は撫で調整である。内面は口縁端部は撫で、他は笠磨き調整である。胎土に径1mm前後の長石、石英、チャートを含み良好である。焼成は良好で、色調は、淡乳褐色である。飾られた土器であるが、とくに胎土について他の土器と特徴のある点ではなく、現状では一様在地の土器としておく。71は口縁部を上方に拡張し、擬凹線を施す。調整は内外面とも撫である。胎土に径1~2mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。焼成は悪く、色調は淡乳褐色である。

73、74は小型鉢形土器である。73は外面上半部には叩きが残り、下半部は叩きを笠磨きで消している。内面は撫で調整である。口縁端部は指押さえ後軽く撫である。胎土に径1~3mm大の砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は赤褐色である。74は完形の同じく小型鉢形土器である。外面は撫で、内面は口縁部に刷毛調整が残るが、全体に撫で調整である。胎土に径1~5mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含むが良好である。焼成は良好で、色調は、赤褐色である。底部から体部にかけて黒斑がある。

75、76は高杯である。共に残存状態が悪く、また焼成も不良である。75の脚部には粗い刷毛調整が施される。胎土に共に径1~2mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。色調は、共に赤褐色である。同一個体の可能性もある。

以上の土器からみて時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

## 2) SX 01

77は口縁部が直立する壺である。内外面とも撫で調整であるが、口縁部は丁寧な横撫で、内面は粘土紐の接合痕が残る程度の粗い撫である。胎土に径1~3mm大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。色調は、赤褐色である。焼成はやや悪い。78は口縁部が直立した後外方に開く壺である。内外面とも僅かに刷毛目が残るが、丁寧な撫でを施す。胎土に僅かに径1mm程度の長石、石英、チャート、クサリ礫を含むが、良好な胎土である。焼成は良く、色調は赤褐色である。78は外方に開く口縁部を持つ壺である。外面は丁寧な撫で、内面は粗い撫である。胎土は良好で、径1mm程度の長石、石英、チャート、クサリ礫を僅かに含む。焼成は良好で、色調は淡乳褐色である。

80は高杯である。口縁部を少し欠くがほぼ完形である。全体に丁寧な撫

### 挿図写真17 SX01遺物出土状況（南から）

でを施す。焼成は良好で、色調は淡乳褐色である。

81は外方に開く口縁を持つ壺である。口縁端部は僅かに肥厚する。内面体部は削りを施す。外面体部に少し刷毛調整を残すが、他は丁寧な撫で調整である。胎土に径1mm程度の長石、石英、

チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好で、色調は淡乳褐色である。82は口縁が少し外方に開く壺である。調整は内外面とも撫でである。焼成は良好で、色調は赤褐色である。83は、調整と器形から壺の体部と考えられるものである。体部外面は丁寧な撫で、内面は接合痕が残る程度の粗い撫である。ただし体部外面下半部はやや粗い撫である。胎土に径1mm程度の長石、石英、チャート、クサリ礫を含むが良好である。焼成は良好で、色調は淡乳褐色である。

以上述べたことから二三気付いた点を列記する。出土した土器すべてについて細かく検討した訳ではないが、全体的な傾向としては甕に属する土器はなさそうである。ただし81などを甕とするか壺と考えるか、など検討の余地はのこる。他に高杯の脚部や弥生時代土器底部が出土している。

次に全体に土器の器壁が厚く、粘土紐の接合痕が残り、粗雑な造りが特徴として捉えられる。また土器の色調が、乳褐色系統とともに赤系統のものが目立つことも付け加えておかなくてはならない。明石川中下流域では赤系統のものが皆無と言うことではないが、乳褐色系統が主流を占めるなかで、特徴として捉えてもよいのではないかとおもわれる。つまりこの点からSX01出土の土器は、在地性の高い土器群として考えられよう。

時期については、布留式併行と考える。

### 7. 小結

遺物のまとめとして、主要な遺構の順序を示しておきたい。

---弥生後期後半-----布留式-----  
-DトレンチSB01---DトレンチSX01 2トレンチSK01---  
-----5C後半-----  
-----2トレンチSB01---BトレンチSD01（埋まる）---  
上記のように単純化出来るものか、問題も多いと思われるが、仮に整理しておきたい。

次に古墳時代の土器では、器形には様々な地方の影響を持つように見られる土器もあるようである。赤褐色系の土器で、胎土に特にクサリ礫やチ



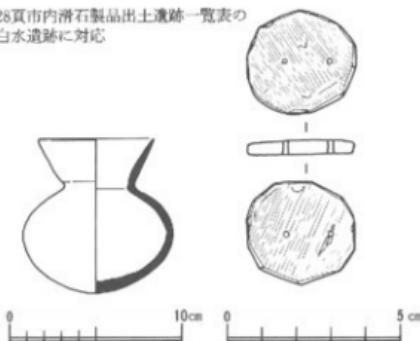
ヤートを含むものは、一様在地性の高い土器であるとしておきたい。

- 註1 土器の記述については基本的には「船橋」I・II 原口正三、田辺昭三他、平安学園考古学クラブ 1962「陶邑古窯址群 I」田辺昭三、平安学園考古学クラブ 1966 に準拠した。
- 註2 「弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について」 第18回埋蔵文化財研究会 1985
- 註3 「播磨・長越遺跡」兵庫県文化財調査報告書 第12冊 兵庫県教育委員会 1978  
大溝出土壺A<sup>1</sup>例と近似している。
- 註4 昭和60年度の試掘調査で、2トレンチ S B 0 1 の東北約30mの試掘坑 T P №70で、住居址と推定される床面や遺物が確認されている。
- 註5 上記の他に以下の文献を参考にした。  
「縄向」 横原考古学研究所編 1976  
岩崎直也「四国系土器群の搬出」 大阪文化誌第17号 1984  
「深江北町遺跡」 兵庫県文化財調査報告書 第54冊 兵庫県教育委員会 1988  
「瀬戸内の弥生後期の編年と地域性」 古代学協会四国支部  
—土器からみた瀬戸内の弥生文化— 第四回大会資料 1990

#### 〔付図〕西区白水出土の遺物実測図



28頁市内滑石製品出土遺跡一覧表の  
白水遺跡に対応



- 註1 上掲遺物実測図は、1972年春、村上鉱揚・喜谷美宣両氏が当日の発掘調査を終え、帰路に着く際に、上掲位置図において工事の為掘削していた水田の断面より採取されたものである。採取時には小型丸底壺内には土が詰まっていた。その後、遺物水洗時に小型丸底壺内より双孔円板が検出された。
- 註2 小型丸底壺は、口縁部の一部を欠くが、そのほかは完存する。表面の残存状況は悪く調整は殆ど不明である。胎度は良好、焼成はやや悪く、色調は淡赤褐色である。滑石製双孔円板は、銀白色を呈し脂光沢を持つ。直径31mm、厚さ4mm足らずで、重量は2.7gである。
- 註3 出土遺物は、現在神戸市立博物館に保管されており、同館喜谷氏のご厚意により実測、掲載についての便宜を計っていただいた。

## 第4章 まとめ

### 第1節 調査成果

出土遺物は、弥生時代～中世に至り、遺構も弥生時代から中世に至る様々なものが検出された。また南北に長い3、4トレンチを調査することによって、北側高位には安定した段丘があり、南側低位には、二次的な堆積と思われる不安定な疊層が存在することが明らかとなった。

弥生時代後期の押部遺跡は、Dトレンチの住居址・CトレンチのS D 0 3・Bトレンチの下層遺構・4トレンチの落ち込み状遺構などから、段丘の全体に生活の痕跡を残しており、弥生時代の遺構の拡がりが予想される。

また2～C～4トレンチで検出された自然流路からの出土遺物には、弥生時代中期に遡る可能性のある遺物（65, 66等）がある。

古墳時代の初め頃には、2～C～4～Bトレンチにかけて検出されたS D 0 1が掘削される。検出された部分から溝の総延長は約70mにおよぶものである。さらにBトレンチから3、Aトレンチに接続すると想定すれば約200mとなる。（13頁 挿図5 主要遺配置図参照）また2トレンチ中央部の高まりにはS B 0 1・SK 0 1が存在する。高燥な場所を占地した、5世紀中頃の集落の存在が考えられる。このことはS D 0 1によってあたかも段丘の高位と低位の土地を分割し、また高位にあった集落の内外を区画するような機能をもったものとして、S D 0 1は掘削されたものと推定される。

奈良時代には、前年度の調査成果では円面窯の出土が注目される。この遺物のみから当時の役所もしくは、寺院のようなものの存在を予想するには、問題が残るが、BトレンチS X 0 3からも同様の時期の遺物が出土している。またAトレンチだけでなく各トレンチで奈良時代から平安時代の遺物が出土している。これらの点から奈良時代から平安時代の遺構が付近に存在することは容易に予測される。

次の時代の中世には溝状遺構や何度も渡る盛土層が形成される。今年度調査対象地が、生産の場として利用され、水路の掘削や田圃の拡張が行われたのではないだろうか。そして中世の集落は、現在の集落のあるあたりに営まれたのであろう。

以上のように、弥生時代から中世に至るまで人々と生活した人々の生活の一端を知ることができる資料が得られた。またこれまで未解明であった明石川上流域での重要な資料を呈示していると言えよう。

## 第2節 明石川流域における押部遺跡の位置

押部遺跡の東方押部谷町木津には、顯宗仁賢神社がある。これは、億計・弘計の兄弟の伝承にかかわるものとされている。

「古事記」「日本書紀」「風土記」には、顯宗（億計）・仁賢（弘計）の即位前の物語がある。内容についてはそれぞれ多少の異同はあるが、履中天皇の孫、市辺押磐皇子の子の億計・弘計の兄弟が、播磨国美糸郡に難を逃れ、「赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目」のもとで出自を隠し仕えていた。やがて播磨国司として遣わされた「山部速先祖伊豫來目部小柄」に見出され、都に戻り兄弟が即位するというものである。<sup>111</sup>

押部遺跡の北側は、丘陵を挟んで三木市となる。ここに美糸川の支流である志染川が西流する。志染川左岸には、窟屋、細目と言う地名が存在する。窟屋には、億計・弘計の兄弟が難を逃れて身を隠したという伝承がある。細目は、縮見（志染）、忍海部（押部）と同様に元来は地名で、地名を物語の上で個人名としたものであろうとされている。（1頁挿図1参照）

現存する地名とその付近に存在した屯倉に国司が巡廻してくるという、機能や組織、その構造については史実として捉えられているようである。<sup>112</sup>ただし億計・弘計の発見譚は伝承の域を出ないものと考えられる。<sup>113</sup>

上記をふまえて、志染川周辺の遺跡の状況はどうであろうか。付近では10数件の調査がなされている。しかし「縮見屯倉」、「山部連」と「忍海部造」の機能より考えられる製鉄に関わるような遺構・遺物は未検出であり、また志染川左岸の窟屋、細目周辺では、この時期に相当する遺跡が今後発見される可能性は充分あるが、現状では知られていないようである。<sup>114</sup>

ここでは顯宗・仁賢の即位やこの人物の実在性は、問題ではなく、現存する地名と、この時期（5世紀後半から6世紀前半）のこの地域に史実に即した勢力もしくは集落が存在したかの問題である。志染川周辺域で該当する遺跡が、未発見の現状で押部遺跡の位置は注目すべきであろう。<sup>115</sup>

次に明石川流域での遺跡の分布状況を見てみたい。下流より当時の先進的地位を占める遺跡もしくは拠点的な遺跡を選びだすと、まず吉田南遺跡、新方遺跡、玉津・田中遺跡があげられよう。

そして現状では、その内容にやや精彩を欠くが、中流域では黒田遺跡とその周辺、上流域では押部遺跡周辺が相当すると考えられる。明石川を上・中・下流域に大別した場合に各流域それぞれに中心的な役割を果たす遺跡として、これらを位置付けできるのではないだろうか。<sup>116</sup>

さらに明石川およびその支流域における前方後円墳の分布状況はどうで

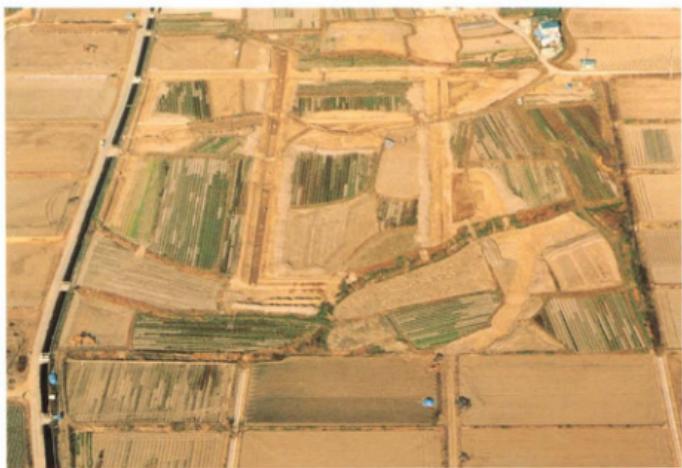
あろうか。明石川下流やその支流である伊川流域には前方後円墳が存在し、首長墓と考えられる古墳が存在するのに対し、明石川上流に首長墓と考えられるものが存在しないのは、ヤマト王権の直轄する屯倉の存在を充分考慮にいれなければならない点であろう。<sup>註11</sup> また明石川流域の特性として捉えるべきものであろう。

いづれにせよ以上述べたことから、「記」「紀」および「風土記」に記載されるような一勢力が、当遺跡周辺に存在した可能性は全く否定することはできないであろう。

- 註1 日本古典文学大系「風土記」 岩波書店 1958  
日本古典文学大系「日本書紀」 岩波書店 1967  
日本思想大系「古事記」 岩波書店 1982  
ここでは、「日本書紀」の記述に従うこととする。
- 註2 今対象としている明石川上流域と志染川下流域は、現在の行政区画上では、丘陵を境に神戸市と三木市に分けられているが、赤石郡の範囲の捉え方は、時代によって変わるものである。「紀」では古い伝承に基づいて、赤石郡として捉えているようである。「紀」補注  
註3 和田 萃「古墳の時代」 大系日本の歴史2 小学館 1988  
註4 八木 充「播磨の屯倉」 古代の日本5近畿 角川書店 1970  
註5 山尾幸久「日本古代王権形成史論」 岩波書店 1983  
註6 註2に同じ  
註7 播磨の渡来系氏族と鉄との関連について前掲註3、4においても論究されている。
- 註8 三木市埋蔵文化財調査概報昭和50~59年度三木市教育委員会 1986  
昭和58~60年度兵庫県埋蔵文化財年報兵庫県教育委員会 1986~88  
細目・高男寺・窟屋の各地区の範囲確認調査や分布調査がされている。  
5~6世紀にかけての大規模な遺跡の存在は、現在公表されている資料からは、窺い知るものはないようであるが、その存在を否定してしまう材料もないのが現状である。
- 註9 雄略朝をどのような時期と見るかによって顯宗・仁賢の時期も考慮しなければならないが、5世紀後半頃とすれば、後出の顯宗・仁賢の時期に、忍海部（押部）に当たる一勢力が志染川から明石川上流域にかけての地域に輩出していたことは考えられる。
- 註10 27, 28頁参照
- 註11 現状で知られる限りでは、押部遺跡の西方3km足らずの丘陵上に、周辺では唯一の前方後円墳である金棒池古墳が存在する。時期が後期に属することと、明石川流域という観点から現段階では、金棒池古墳についての位置づけは、難しい点が多い。
- 註12 櫻本誠一・松下 勝「日本の古代遺跡3」兵庫南部 保育社 1984

# 写 真 図 版





1 調査地全景航空写真（南から）



2 調査地全景航空写真（東から）



3 A トレンチ全景（東から）

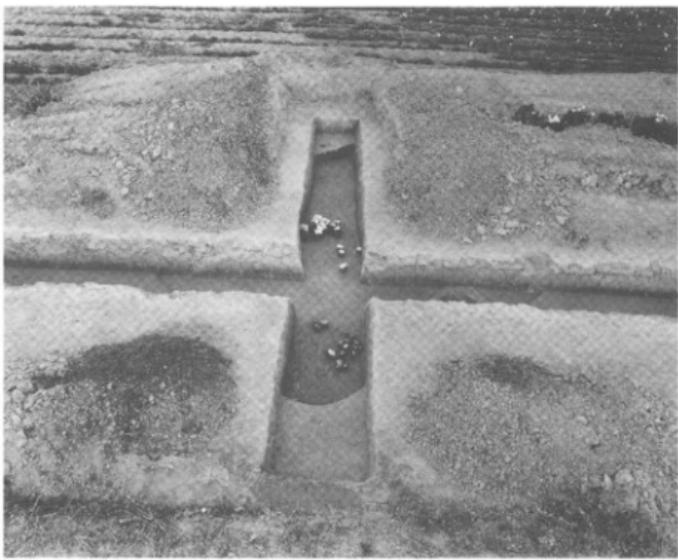


4 B トレンチ全景（東から）

写真図版 3



5 2トレンチ全景（東から）



6 2トレンチS B O I (南から)



7 2 トレンチSK01遺物出土状況（南から）



8 2 トレンチSK01完掘状況（南から）

写真図版 5



9 3 トレンチ全景（北から）



10 3 トレンチ S D 0 4 (東から)



11 4トレンチ、Cトレンチ全景（南から）



12 2, 4トレンチ及びCトレンチ流路（南西から）

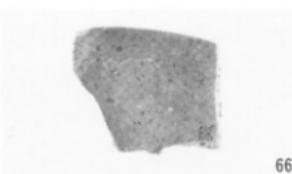
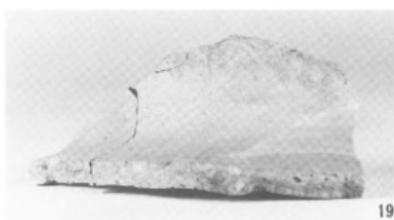
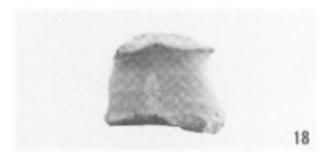
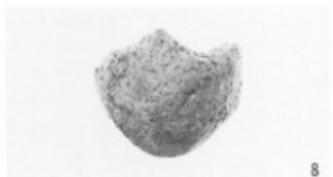
写真図版 7



13 D トレンチ全景（北から）



14 D トレンチ S B O I (西から)



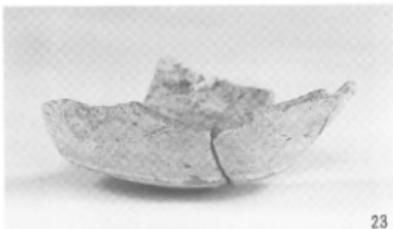
写真図版 9



60



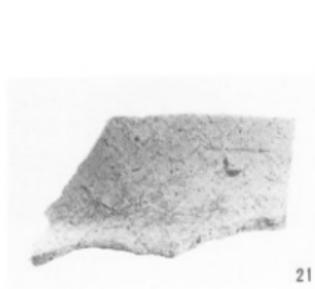
62



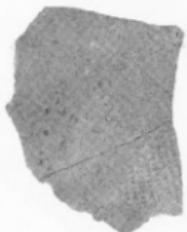
63



64

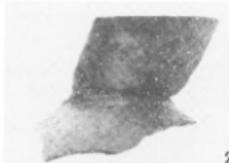


65

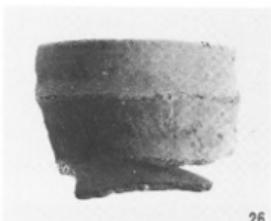


67

B・2 トレンチ遺構内出土遺物写真



25



26



27



28



29



30



32



31



34



33

写真図版11



35



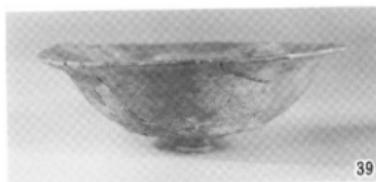
36



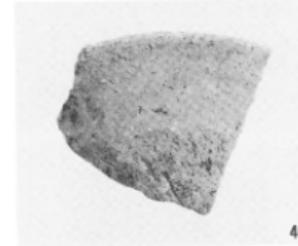
37



38



39



40



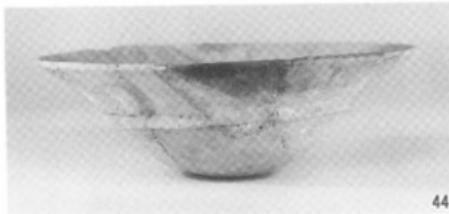
41



42



43



44

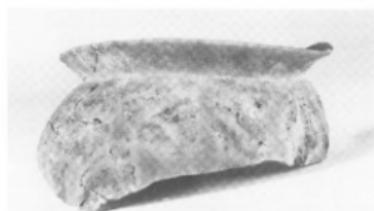
2 トレンチSK01出土遺物写真



45



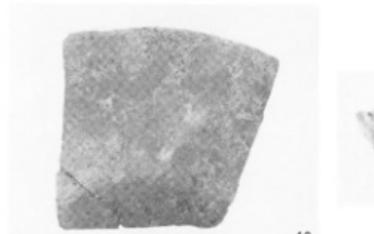
48



47



46



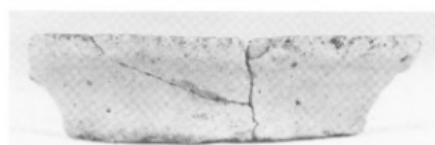
49



50



52



51

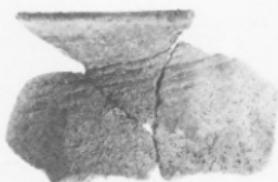


59



58

写真図版13



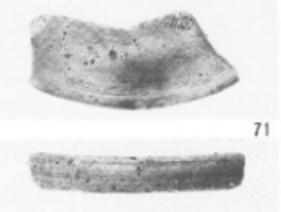
67



70



68



71



72



69



73



75

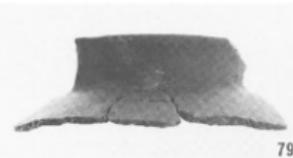


74



76

D トレンチ S B 0 1 出土遺物写真

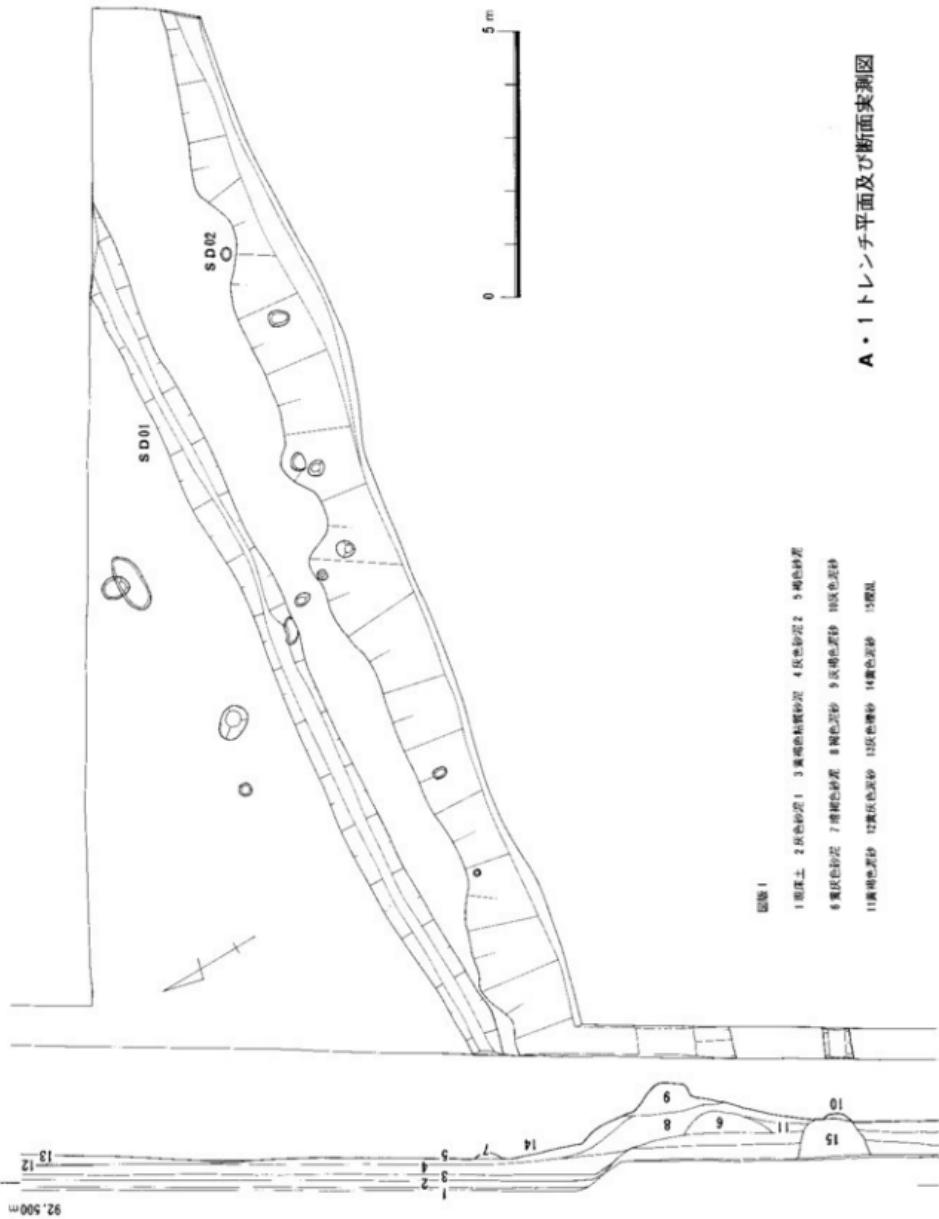




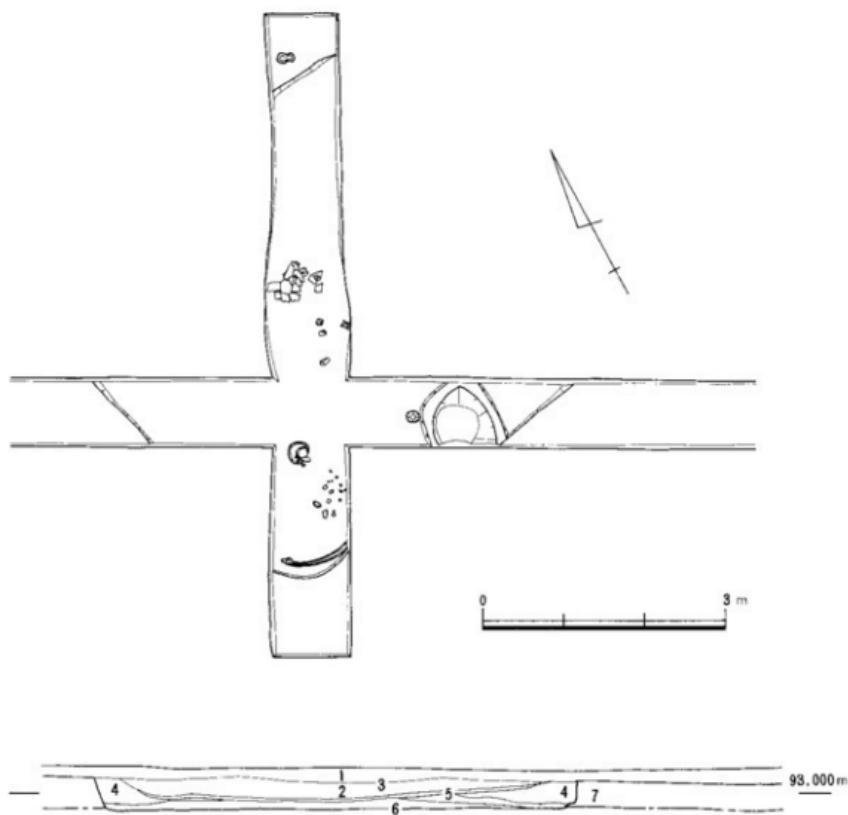
# 図 版



A・1 トレンチ平面及び断面実測図



図版 2

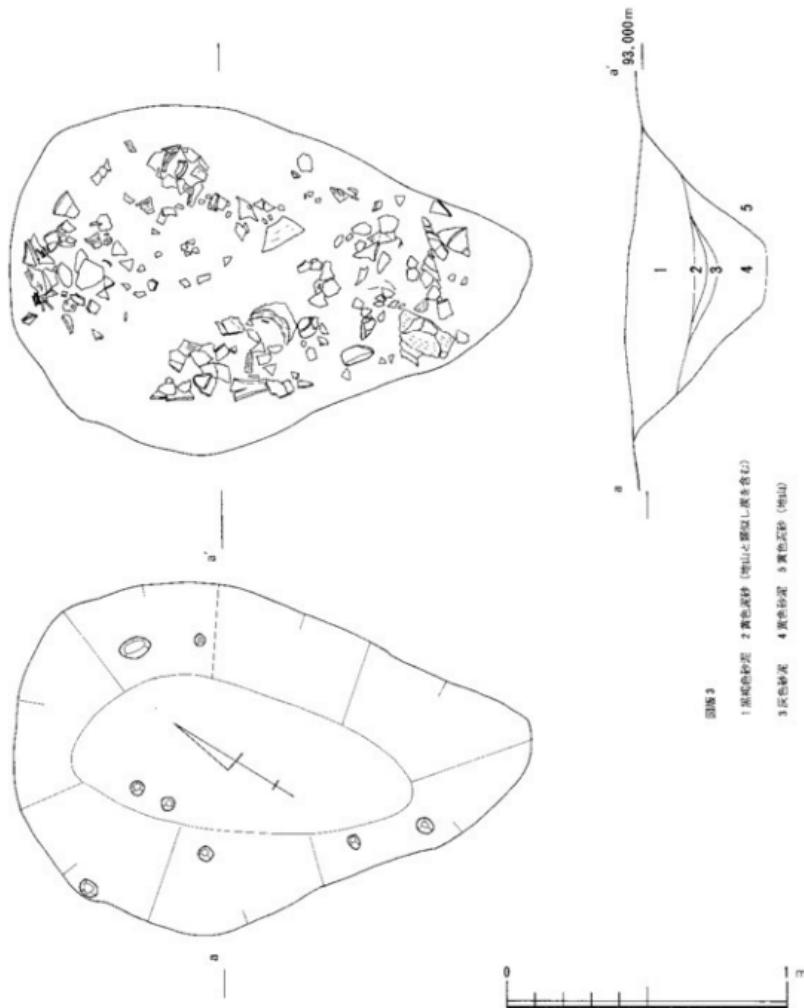


図版 2

1 黄灰色砂泥 2 灰褐色泥粉 3 暗色泥砂（マンガンを含む）

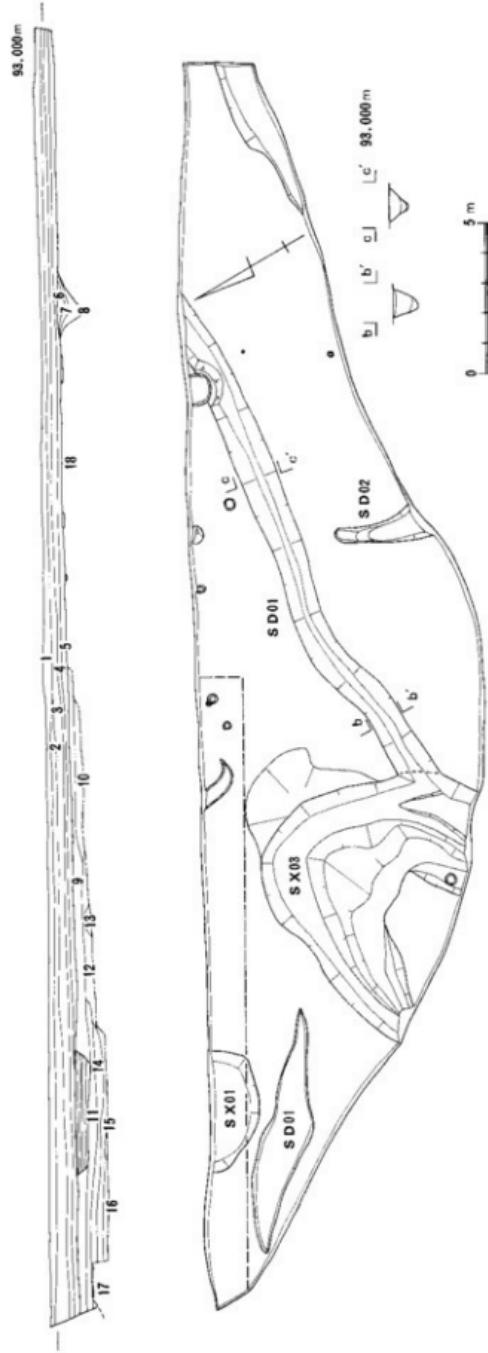
4 桃色泥砂 5 黄褐色泥砂 6 黄灰色泥砂 7 黄色泥砂（地山）

2 トレンチSB01平面及び断面実測図



2 トレンチSK01遺物出土状況平面・完掘平面及び断面実測図

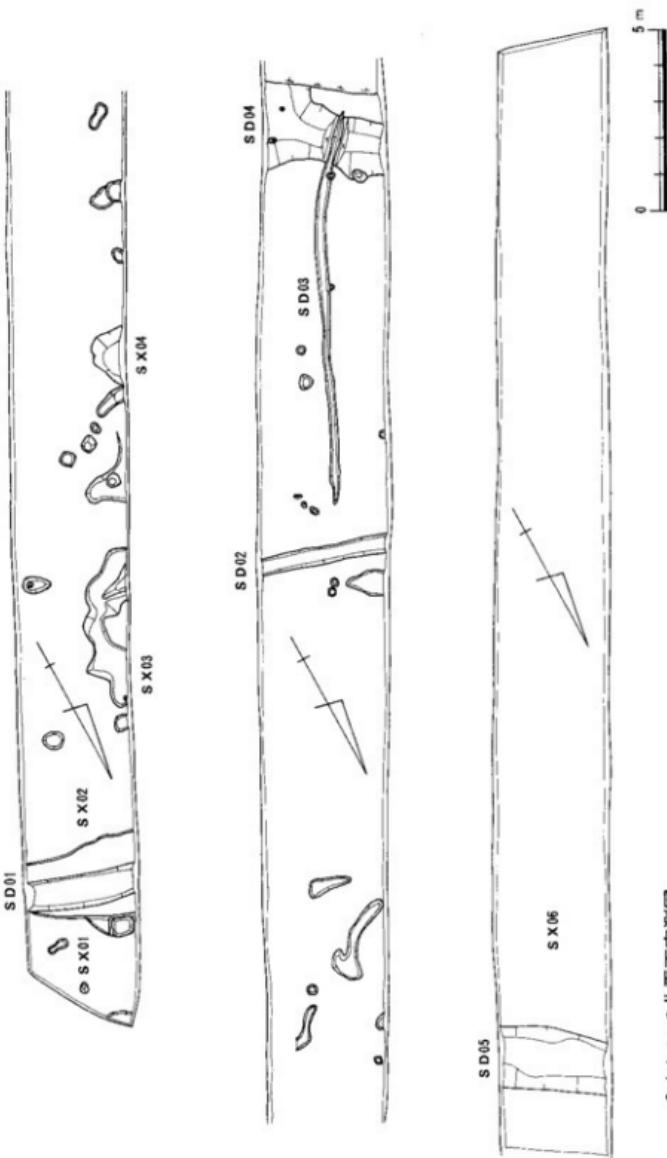
図版 4



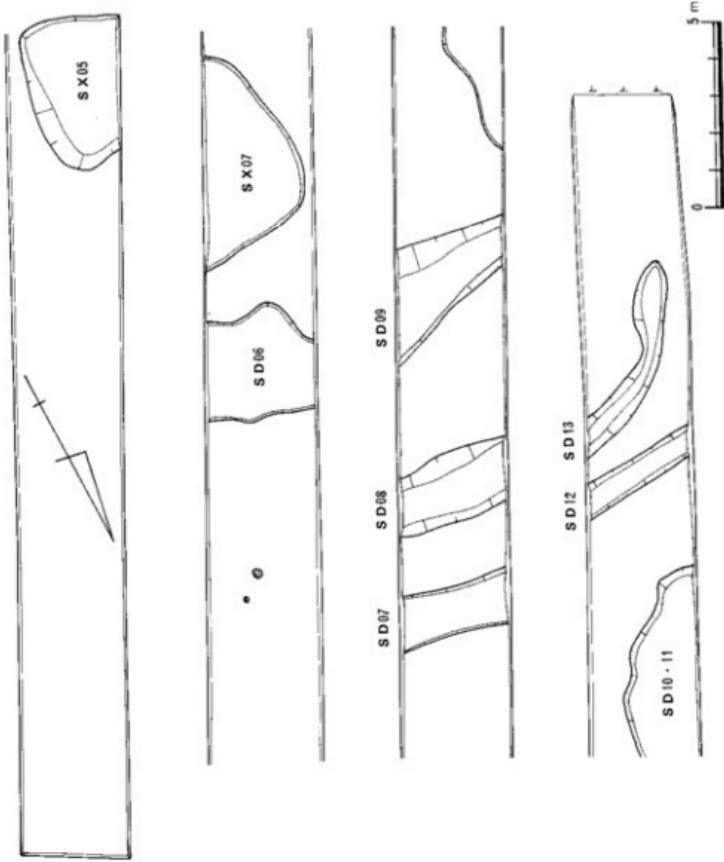
図版 4

- 1 白色砂岩
- 2 黄灰色砂岩
- 3 灰黑色砂岩
- 4 淡褐色砂岩
- 5 黄色砂岩
- 6 暗褐色砂岩
- 7 浅灰色
- 8 灰色砂岩
- 9 黄褐色砂岩
- 10 黄灰色砂岩
- 11 白黄色砂岩
- 12 白白色砂岩
- 13 淡褐色砂岩
- 14 淡褐色砂岩
- 15 淡黄色砂岩
- 16 淡黄色砂岩
- 17 淡褐色砂岩
- 18 黄色砂岩 (地山)

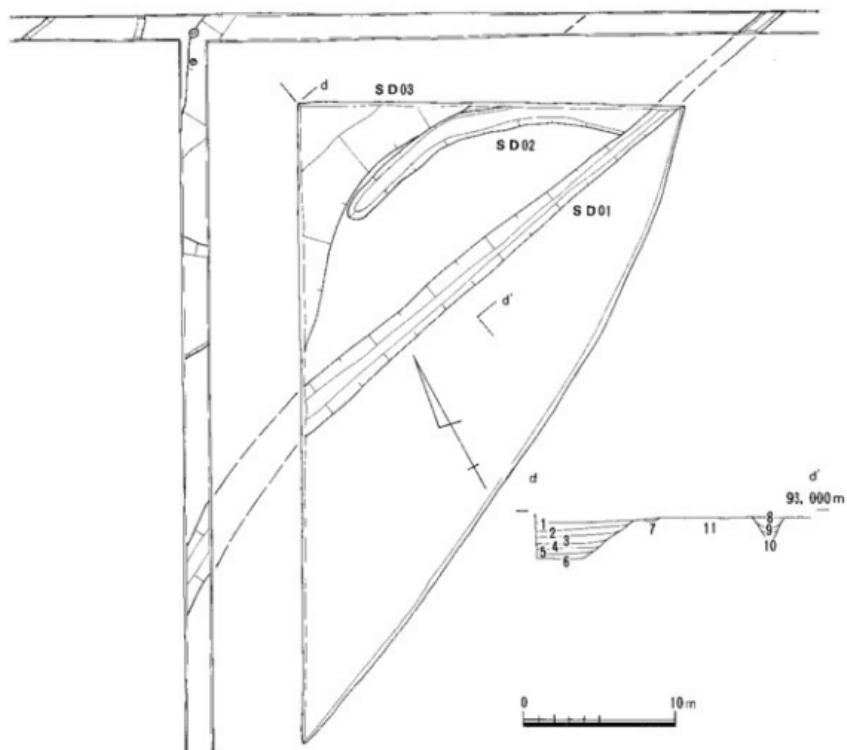
B テレンチ平面及び北壁断面実測図



3 トレンチ北平面実測図



3 ドレンチ南平面実測図

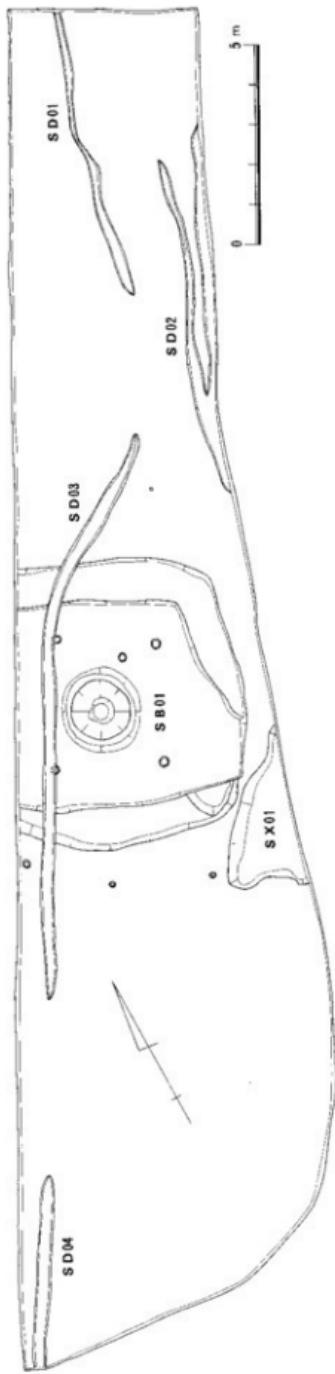


図版 7

- 1 深褐色砂泥 2 反褐色砂泥 3 黄反色泥砂 4 淡黄色泥砂  
 5 灰色砂 6 淡褐色砂泥 7 深褐色砂泥  
 8 暗褐色砂泥 9 棕色砂泥 10 淡色泥砂 11 黄色泥砂(地山)

C・2・4 トレンチ平面及びC トレンチ断面実測図

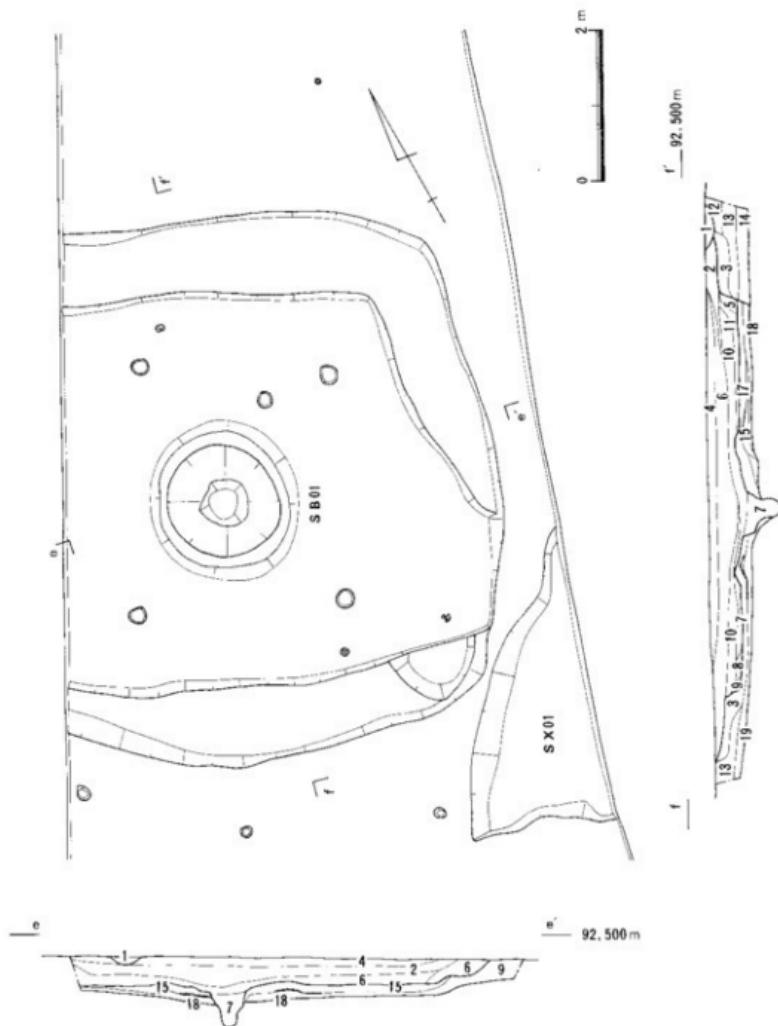
図版 8



□トレンチ平面実測図

図版 9

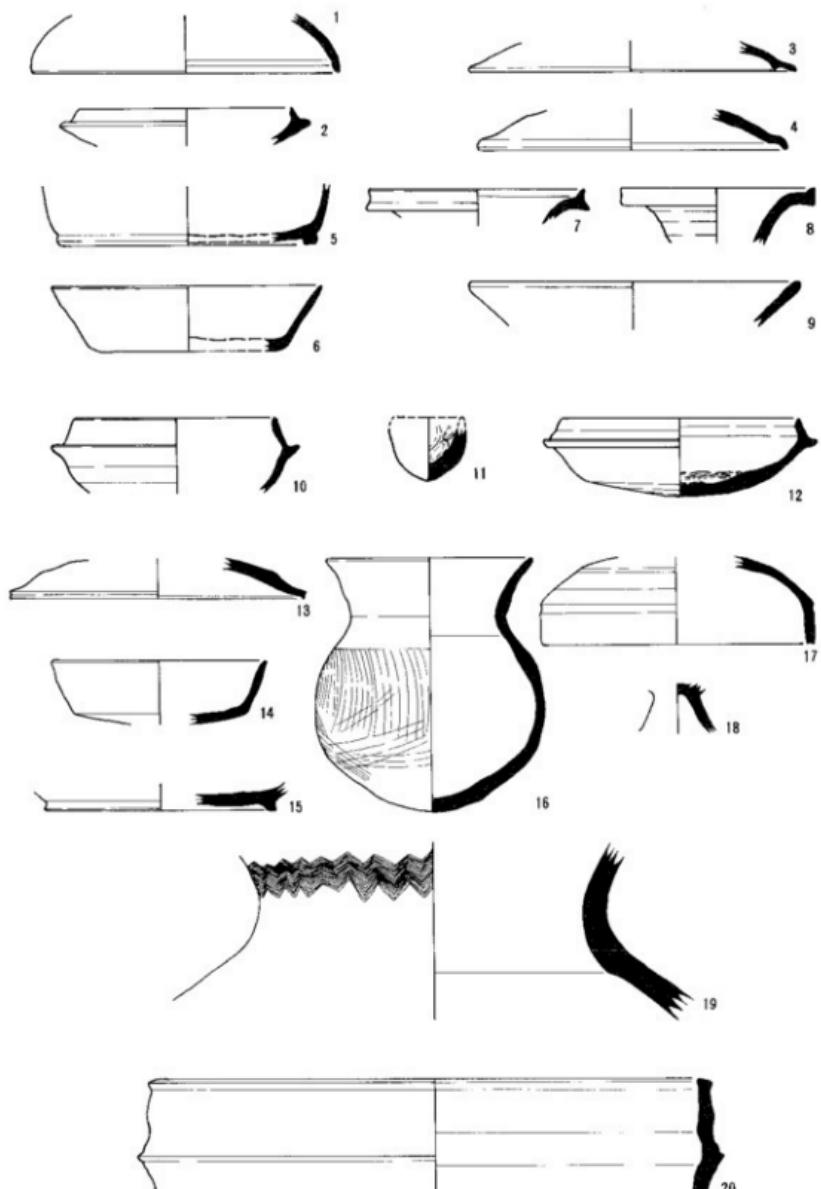
## D トレンチSB01平面及び断面実測図



図版 9

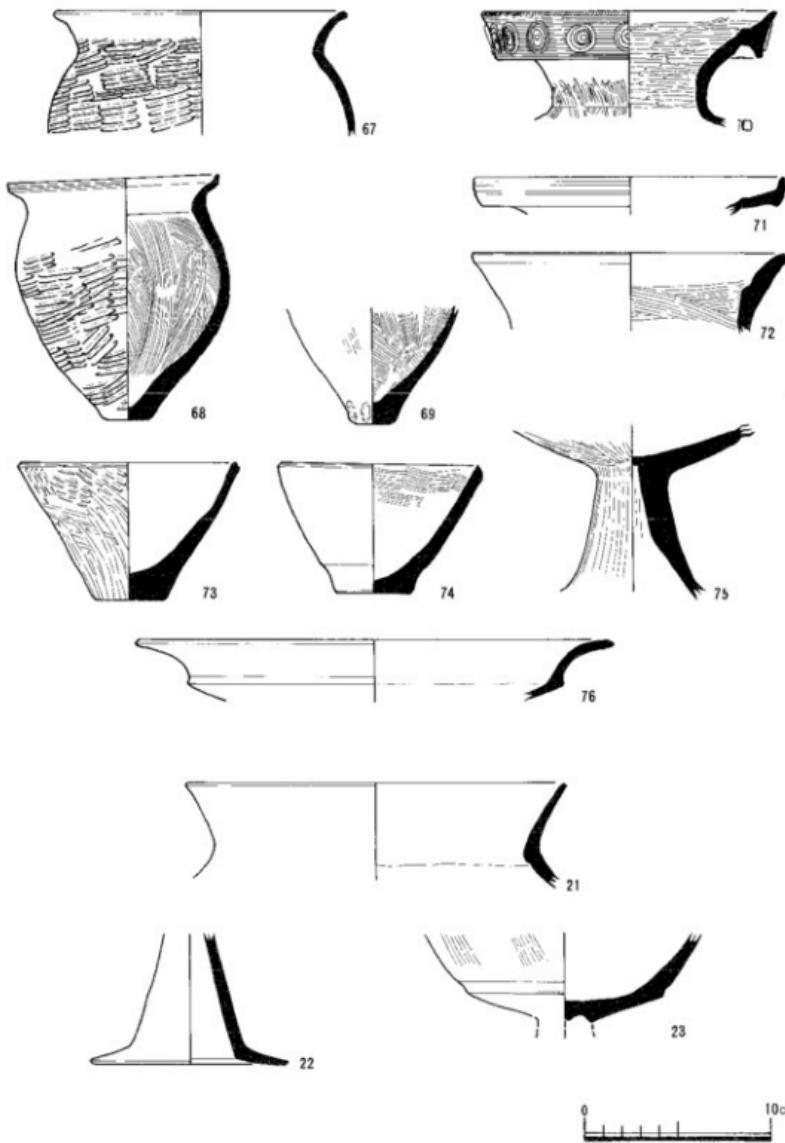
- 1灰褐色砂 2黄茶褐色砂泥 3黄灰色砂泥 4黄茶褐色砂泥 5明黄灰色砂泥 6暗黄褐色砂泥（炭・灰を含む）
- 7反茶褐色砂泥 8茶褐色砂泥 9淡茶褐色砂泥 10明黄褐色砂泥 11白黄褐色砂泥 13黄褐色砂泥
- 14明黄褐色砂泥 15反黄色砂泥 16茶褐色砂泥（炭・灰を含む） 17黄灰褐色砂泥 18黄褐色砂泥

図版10



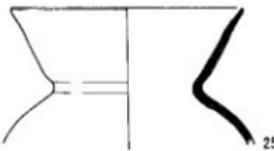
A・3・B・E トレンチ遺物包含層出土遺物実測図





D・2 トレンチSB01出土遺物実測図

図版12



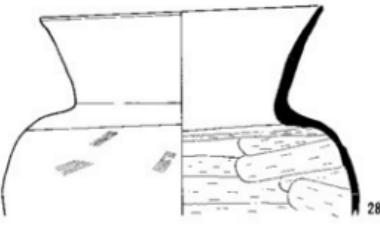
25



26



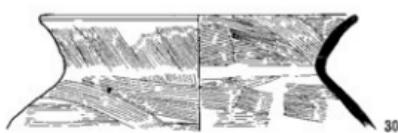
27



28



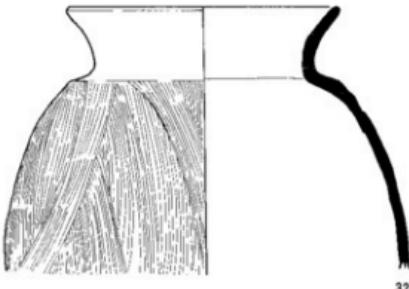
29



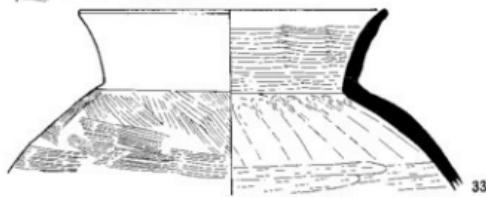
30



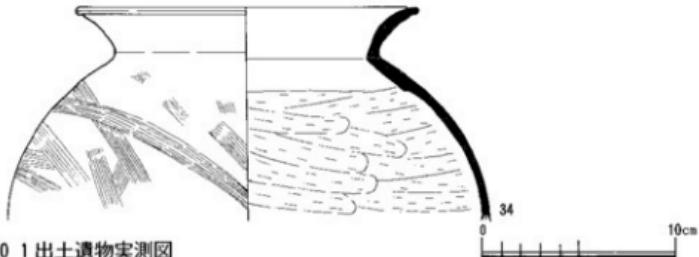
31



32



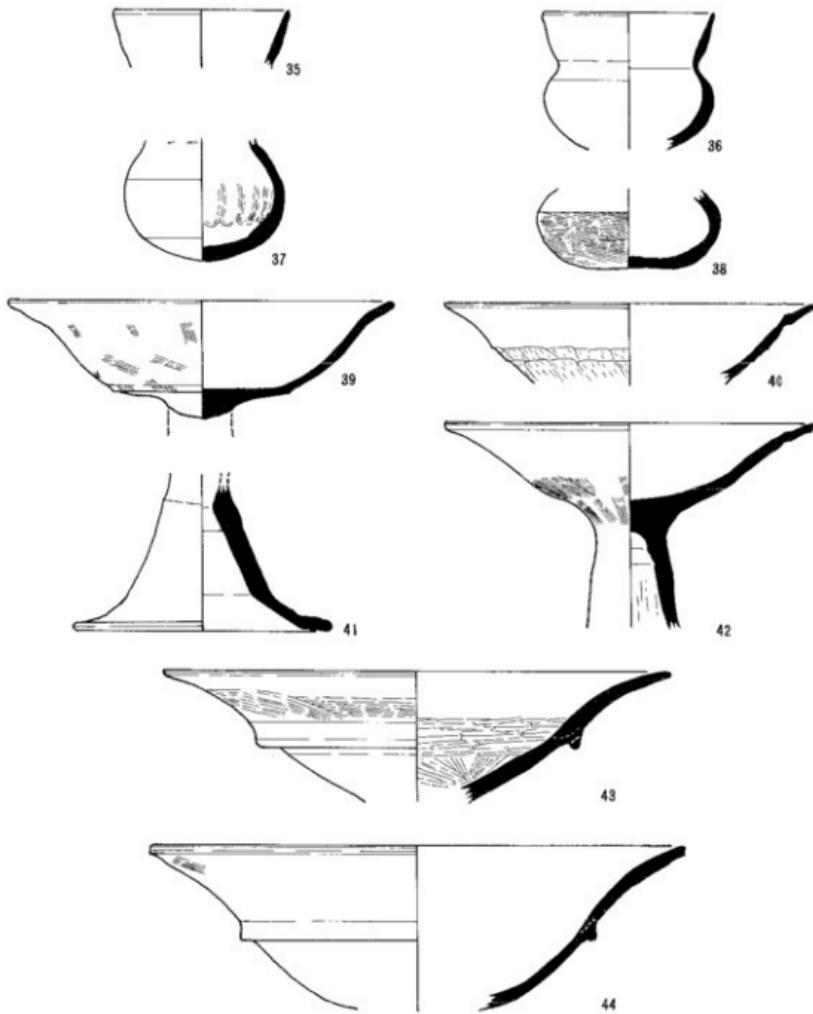
33



34

10cm

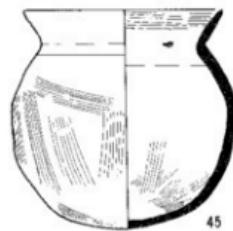
2 トレンチSK01出土遺物実測図



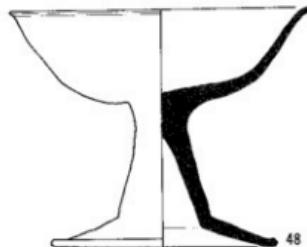
2 トレンチSK01出土遺物実測図



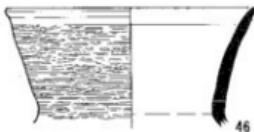
図版14



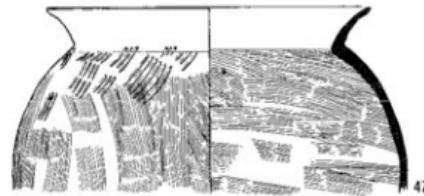
45



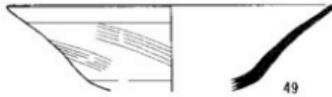
48



46



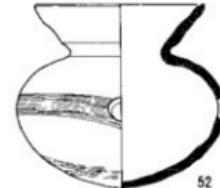
47



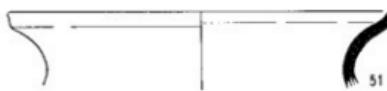
49



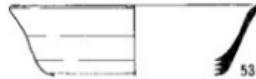
50



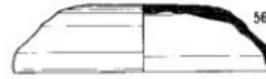
52



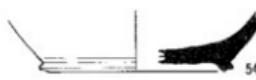
51



53



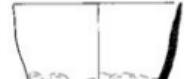
56



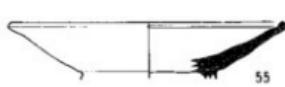
54



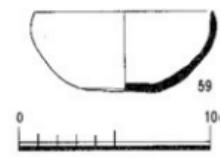
57



58



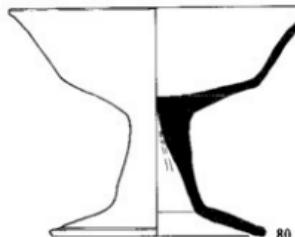
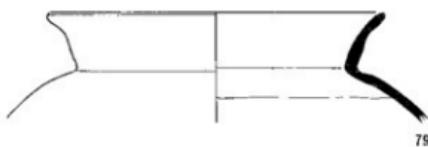
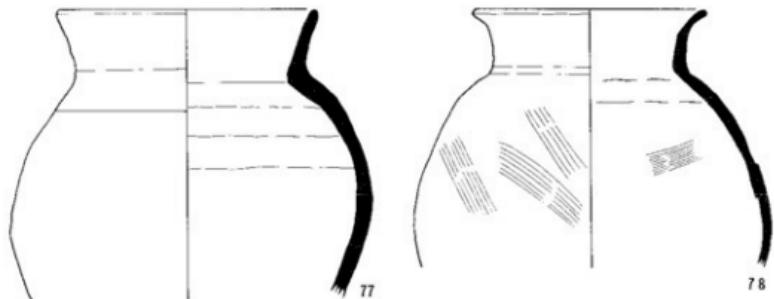
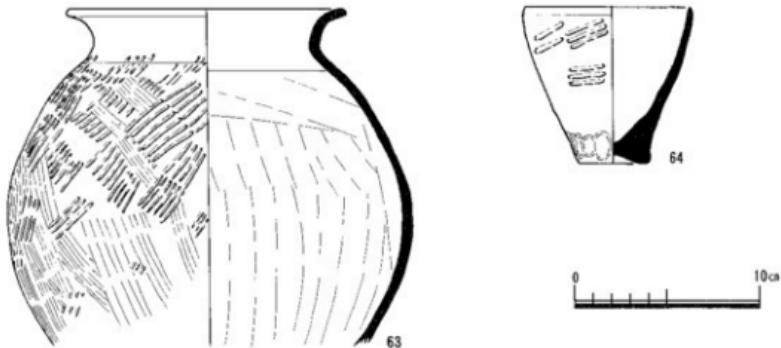
55



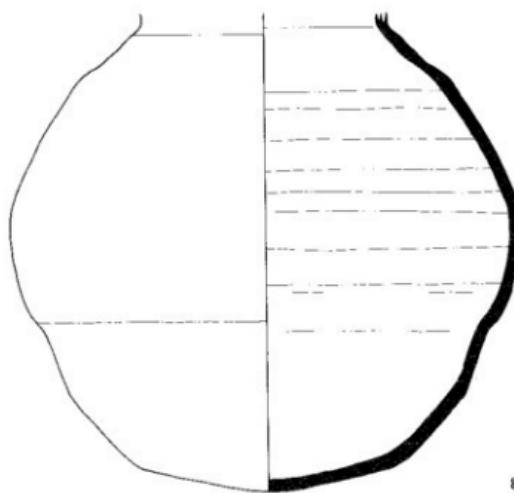
59

10cm

3・B トレンチ遺構出土遺物実測図



C・D トレンチ遺構出土遺物実測図



D トレンチ S X 0 1 出土遺物実測図



**押部遺跡 神戸市西区押部谷町所在  
第2次発掘調査概報**

---

平成3年3月 日 印刷

平成3年3月31日 発行

発行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷 大和出版印刷株式会社

---

広報印刷物登録 平成2年度第269号 (A-6類)